第55回　日本アメリカ文学会全国大会

ノートルダム清心女子大学　2016年10月１日（土），２日（日）

研究発表・ワークショップ・シンポジア要旨

第１室（ノートルダムホール本館２階　200ND）

司会　大　島　由起子

１．漂流する島々――Melville の *Moby-Dick* における日本の表象とジョン万次郎

一橋大学（院）　笠　根　　唯

本発表は，Herman Melville（1819-91）の *Moby-Dick*（1851）における日本の表象とジョン万次郎（1828-98）との関係性を19世紀の日本からの漂流者の事実性に基づいて明確化し，そうした考察とアメリカン・スタディーズにおける *Moby-Dick* の“Isolatoes”のイデオロギー批評的読解との接続可能性を模索する。

Melville のテクストとジョン万次郎との関係性は，彼らの同時代性の強調や捕鯨経験の類似，テクスチュアルな読解などを通して，中浜博の『中濱万次郎』（2005），Christopher Benfey の *The Great Wave*（2005），牧野有通の“The Modern Age as Ambiguous Wall”（2010）などによって指摘されてきた。こうした指摘を受けて本発表は，*Moby-Dick* における“the Japanese islands――Niphon, Matsmai, and Sikoke”（473）という記述を議論の出発点とし，“Niphon”や“Sikoke”といった言葉がいかにして Melville の語彙となったかの理由を，両者の知人 Samuel C. Damon 牧師が編集長を務め，ホノルルの教会より発行され，Melville も講読していたとされる当時の新聞 *The Friend* における日本と万次郎を含む日本からの漂流者を報じる1851年１月９日の記事“Expedition to Japan”などに求めることから始める。Benfey は“Sikoke”を四国のスペルミスとし，これを Melville 自身あるいはアメリカの日本に対する無知によると述べるが，“Sikoke”は「シコーク」と発音される（竹林滋・齊藤弘子，『英語音声学入門』）ことから，この記述は Melville が耳で捉えた音声的情報に依拠する可能性が高い。これは，Melville がホノルル滞在中に万次郎を含む日本人漂流者を世話していた Damon 牧師を介し，万次郎と共に四国から漂流した筆之丞，五右衛門，重助，寅右衛門といった漂流者と出会っていた可能性を示唆するものと考えられる。

岩尾龍太郎が『江戸時代のロビンソン』（2005）において国民国家の記号としての「日本」という呼称は対外関係の内に構築されたものであり，森田勝昭が『鯨と捕鯨の文化史』（1994）において「ジャパン」という語は当時捕鯨業界において抹香鯨の獲れる海域を指すものであると説明するとき，万次郎などの日本からの漂流者は，岩尾が『幕末のロビンソン』（2010）で彼らは「国民国家からは本質的に外れる存在」と指摘するように，日本という国民国家を代表する主体というよりむしろ，国民国家的枠組みからも「漂流」する国民意識なき主体と考えられる。上述の“Expedition to Japan”において，万次郎の帰国と共に報じられる開かれるべき国としての日本の疎外性は，当時のアメリカの言説空間において日本という国民国家概念の強調と共に，日本からの漂流者を「日本人」漂流者として人種化するものとして作用したことを示唆しうる。これに比して，国民国家的枠組みから外れる万次郎のような漂流者の姿を，*Moby-Dick* において“the remote waters of Japan”や“impenetrable Japans”といったようにその疎外性が繰り返し強調される「島」としてテクスチュアルに読み解く時，小説中の夥しい島々との中心なき関係性の中でこれらジャパンズが帝国的支配を可能にする空間としての海に比して，そこに「漂流する島々」として捉え返されると同時に，その疎外性によって漂流者の主体性を脱中心化する。こうした中心なき主体性は，William V. Spanos の *The Errant Art of Moby-Dick*（1995）や Cesare Casarino の *Modernity at Sea*（2003）などで指摘される帝国的支配の図式から逸脱する Sub-Subish な生としての“Isolatoes”との接続可能性を示すだろう。この意味において，19世紀の日本からの漂流者の事実性を介した *Moby-Dick* における疎外された島としての日本の表象のテクスチュアルな読解は，帝国批判というイデオロギー批評と結ばれうるものと考えられる。

２．もう一人の Emerson とアメリカン・シンクレティズム――Mary Moody Emerson の書簡における自己探求の軌跡

日本大学　内　堀　奈保子

Ralph Waldo Emerson（1803-82）が標榜した超絶主義は，19世紀当時から現在まで毀誉褒貶を受けながらも，アメリカ文学思想史の中で突出した思想潮流として評価を受けてきた。近年，この評価に若干の修正が加えられつつあることは注目に値する。その修正とは，Emerson 家のもう一人の天才，Mary Moody Emerson（1774-1863）の再評価である。2006年出版の Lawrence Buell 編纂によるアンソロジー，*The American Transcendentalists* には，超絶主義の最初期の思索者として Waldo（幼少時から Ralph ではなく Waldo を呼称としていた）の叔母，Mary Emerson の書簡に一章分の紙幅が費やされている。また，2014年出版の Jana L. Argersinger と Mary Emerson 研究の第一人者 Phyllis Cole の編著による *Toward a Female Genealogy of Transcendentalism* では，Lydia Maria Child や Margaret Fuller らの先駆的思想家として Mary Emerson が位置づけられ，甥 Waldo を措いてもその重要性が看過できないものであることが示されている。

このような近年の Mary Emerson 再評価は，Waldo あるいは超絶主義思想に冠されてきた功績を決して減じるものではない。たしかに先述の Cole による1998年の著書 *Mary Moody Emerson and the Origins of Transcendentalism* を筆頭に，Mary Emerson 研究が進むにつれて，Waldo がいかに多くの点で Mary の思索を礎としていたか，また，時にそのまま自分の講演や著書に書き入れるほど Mary の思索に依拠していたかが明らかにされてきている。しかし，また一方で，“masculine rhetoric”と批判を受けることもある超絶主義思想が，実は Waldo や Henry David Thoreau といった Harvard で教育を受けた男性エリート知識人だけでなく，正規の教育を受けず，孤児に出され，親族の老人や子どもの世話と家事を手伝う合間に独学で修養した一人の女性による知的営為の副産物であったことが詳らかにされることは，アメリカ文学思想史における超絶主義の意味合いに深みを増すことになるであろう。

本発表は，こうした超絶主義における女性文筆家，思想家の系譜を再評価する流れに賛同し，Mary Emerson の思想家としての側面の一端を紹介することを目的としている。ただし，Buell も指摘しているように，彼女の思想に揺らぎがみられることに注目しながらである必要があろう。Mary Emerson の書簡を見渡すと，超絶主義思想の胎動がそこかしこに感じられるとともに，彼女自身は超絶主義を否定していることが浮き彫りになってくる。実際，Mary Emerson はドイツやイギリスのロマン主義思想，プラトン哲学，東洋の宗教哲学，様々な神秘主義，自然科学等の超絶主義へと繋がる異文化思想や異教に驚くべき深度と広さをもって関心を払っている一方で，「超絶主義的な汎神論よりずっとまし」だとして，カルヴィニズム色の強いキリスト教信仰を終生手放していない。

この Mary Emerson の相矛盾する姿勢は何を意味するのか。なぜ彼女は女性版 Waldo のごとき超絶主義者とはならなかったのか。これらの問いを，主に彼女の書簡にみられる「個人の内なる神（the God within）」，「自己信頼（self-reliance）」，「大霊（the Over-soul）」といった超絶主義の特徴的な思想への彼女の反応から考察する。Mary Emerson が異文化思想や異教と呼応しながら自身の信仰や思想を進化，変容させていく点は大変興味深いものである。その逍遥の軌跡を辿ることで，Mary Emerson を超絶主義の急先鋒から少しずらし，アメリカという国家のシンクレティズムを浮き彫りにする好例であるとして位置付けたい。

司会　竹　内　勝　徳

３．「母の娘」の系譜――Nathaniel Hawthorne の「フェア・レディ」再考

武蔵大学　新　井　景　子

Nathaniel Hawthorne の作品における女性像は，これまで主に「ダーク・レディ」と「フェア・レディ」という対立項をもとに論じられてきた。Hester, Zenobia, Miriam といった美しく情熱的なダーク・レディたちが，家父長制に反発し，戦い，絶望する女性像を示す一方，Phoebe, Priscilla, Hilda といったフェア・レディたちはヴィクトリア朝的なジェンダー観を体現するという構図である。しかしこれらのフェア・レディたちはどこまで家父長制のモデルに従順な女性像なのだろうか。Hawthorne とジェンダーをめぐる研究においては，小説内でフェア・レディの結婚が結末に置かれることに加え，Hawthorne 自身の“a damned mob of those scribbling women”という有名

な発言によって，彼をミソジニストとみなす立場が優勢であった。それに対し Nina Baym は，従来の Hawthorne 批評でダーク・レディとされてきた女性たちを「リアルな女性」と読み直し，ジェンダー規範から逸脱する女性あるいは家父長制の支配に抵抗する女性が作品の中心に置かれていると評価した上で，Hawthorne が反フェミニストと捉えられてきたことに異議を唱えている。が，その一方で Baym は，フェア・レディを家父長制社会が生んだ「社会的神話」としており，フェア・レディをジェンダーイデオロギーのモデルとみる従来の図式を崩してはいない。そこで本発表では，Hawthorne 作品に現れる「フェア・レディ」を再考し，そこに Hawthorne のアンビヴァレントなジェンダー観がどのように見いだせるかを探る。さらにそれを通して，Hawthorne 作品におけるダーク・レディ／フェア・レディの対立軸を問い直してみたい。

上記の観点から，本発表では特に *The Marble Faun*（1860）に焦点を当て，当時流行した「ヨーロッパを訪れるアメリカンガール」という文学テーマと関連させながら Hilda 像を考察する。作品中何度も「ニューイングランドの娘」あるいは「アングロサクソンの娘」と呼ばれる Hilda は，ヨーロッパを訪れてその豊かな文化に触れるアメリカンガールとして登場しているといえ，Hilda と Kenyon との幸せな結婚で終わる結末も，同時代の「アメリカンガール」小説の典型的なプロットに従っているといえる。しかし，Hilda とヨーロッパとの出会いは，「アメリカンガールがヨーロッパの過去の遺産に触れ教養を高める」といった旅行記ジャンルの延長では必ずしもない。Henry James の国際的小説を半ば先取りするかのように，*The Marble Faun* では Hilda とヨーロッパとの出会いが「罪」の発見のテーマと深く結び付けられ，それが Hilda の "girl" から "woman" への変化に重ねられている。その際特徴的なのは，ヨーロッパに重ねられる「悪」のイメージが，家父長制，特に「父」のイメージに強く結び付けられることである。本発表では，殺人事件の目撃を境に起こる Hilda の変化に注目し，「父」への懐疑，「母」への敬慕，女性に向けられる強い連帯意識などを手がかりに考察する。*The Scarlet Letter*（1850）の Pearl から *The Marble Faun* の Hilda へとつながる「母の娘」の系譜を視野に入れながら，「フェア・レディ」に示される Hawthorne のアンビヴァレントなジェンダー観を探ることで，Hawthorne とジェンダーをめぐる研究に新たな視点を持ち込むことができればと考えている。

4．Wrestling Rhetorics and the Masque of Mythologies in Hawthorne's "The May-Pole of Merry Mount"

ノートルダム清心女子大学　David S. Ramsey

Nathaniel Hawthorne's "The May-Pole of Merry Mount" may be considered as a site of cultural contestation, with competing mythologies, typologies and rhetorical strategies that both reflect and complicate the oft-quoted binarism: "Jollity and gloom were contending for an empire." Ironically, this formulation reveals Hawthorne's affinity with the very position he comes at the end to reject, that of Thomas Morton's *New English Canaan* (1637). While Hawthorne may not have had direct access to Morton's text, his "jollity and gloom" dichotomy seems to reflect at least a redacted echo of Morton's criticism of the "precise Separatists" (Puritans) who were "threatening to make [the community] a woeful Mount and not a merry Mount." The rhetorical trope, which resonates with but predates by centuries the Apollonian/Dionysian dynamic of Nietzsche, is thus Morton's original, not Hawthorne's, yet it provides the underlying structure to and is symptomatic of a text in which a largely sympathetic narrative seems frustrated by its own rigorous denouement.

Looking closely at the texts and editions that Hawthorne read, I apply an intertextual approach that reveals a kind of Bakhtinian *heteroglossia* of competing mythologies and rhetorical traditions. At the same time, Hawthorne largely marginalizes the most prominent risk and conflict: European vs. Native American. This Euro-centric focus is revealed, for example, in the competing naming rights and rites that prompt the story: the May Day ritual of the Maypole that John Endicott disrupts was, in Hawthorne's version, part of a wedding celebration. The primary conflict is presented as a wholly British internecine one (Anglican vs. Puritan), and it rewrites Morton's own problematic account of the Maypole ritual as a "solemne" revel that ritually marked changing "the ancient Salvage name" of "Pasonagessit" to "Merry Mount."

Hawthorne's incorporation of elements from John Milton's masque *Comus* focuses on the blurred human/animal boundary, with overtones of the savagery/civilization nexus and miscegenetic fear of the violation of racial and cultural identity. Moreover, the shape of Hawthorne's narrative can be read as following yet problematizing the basic plot of Milton's masque. Readers of Milton (including Hawthorne, who echoes Milton's phraseology at the end of his story) may remember that Comus' abduction of the protagonist is enabled by an appeal to religious sensibilities that lead her astray (albeit unwittingly) with a Bunyanesque lie: "It were a journey like the path to Heav'n."

第2室（ノートルダムホール本館2階　210ND）

司会　折　島　正　司

1．Jack London の動物物語作家への「抗議」——E. T. Seton と W. J. Long の作品と比較して

京都大学（院）　小　泉　嘉　輝

19世紀後半のアメリカが，フロンティア・ラインを西進させることで発展したことは誰もが知る史実である。また，原生自然が開発される過程で，アメリカ国民が自然保護に対して意識的になり始めたこともよく知られている。この時期に Yellowstone と Yosemite が国立公園に指定されたことが，人々に起こった自然への態度の変化を象徴している。自然への愛情は，必然的に，動物に対しても結びつくことになる。動物に共感できる子どもを育てようと，学校教育に Nature Study が導入されるまでになった。

このような状況において，動物物語が盛んに書かれて読まれたことは，当然の成り行きだったと言える。人気作家の中には，動物の記述に関して博物学者に指摘される者もいた。中でも最も有名なのが，博物学界の重鎮 John Burroughs が *Atlantic Monthly* に寄稿し物議を醸した "Real and Sham Natural History"（1903）である。この小論で，Ernest Thompson Seton と William J. Long が糾弾される。Burroughs は，両作家の動物の記述が事実に基づいていないと批判した。この批判に対して Long が強く反論をし，Burroughs がこれに受けて立ち，さらにその他の専門家や一般読者の賛否両論が次々と活字となって，やがて The Nature Fakers Controversy と呼ばれることになる，動物物語をめぐる論争へと発展することになった。

この論争は，時の大統領 Theodore Roosevelt の介入により決着する。ハンターとしても有名だった Roosevelt は動物に造詣が深く，論争への参加が期待されていたが，当初は大統領という立場を考え，その期待に応えることはなかった。しかし，論争が落ち着く気配はなく，しびれを切らした Roosevelt は，*Everybody's Magazine* に "Nature Fakers"（1907）を発表し，博物学的知識の裏付けがない動物物語を書く作家を猛烈に攻撃する。合衆国最大の権力者の介入により，批判された動物物語作家たちの信用は失墜してしまう。

Jack London もまた，大統領の攻撃対象となった作家の一人だった。Roosevelt に対して London は，*Collier's* に "The Other Animals"（1908）を発表し，Burroughs と Roosevelt に反論する。彼は，人間もまた動物であることを主張して，博物学界の重鎮たちの考えを「人間中心的」だと批判した。Seton や Long の著作が公立図書館から姿を消すという結果になった一方で，London の作品が現在でも広く読み継がれていることは，彼の反論が適切だったという証左の一つかもしれない。

しかしながら，本発表では，論争の勝敗やその結果について特に取り上げることはしない。着目したいのは，London が "The Other Animals" において述べた，自身の動物物語の執筆動機である。彼は，*The Call of the Wild*（1903）と *White Fang*（1906）を「何人かの『動物作家』」に対する「抗議」として書いたと説明している。同じように動物物語を書く作家たちを批判することを意図して，物語を書いたというのだ。興味深い内容ながらも，この文章は Roosevelt らを批判する目的で書かれたために，この動機については1パラグラフのみの簡単な説明に終わっている。ここには，論考すべき余地があるだろう。

本発表は，London が詳述しなかった「動物物語で動物物語を批判する」という目的が，作品中にどのような形で表れているかを明確にする試みである。彼が「執筆責任がある」とした *The Call of the Wild* と *White Fang* を，Seton や Long の作品と，語りや動物の表象方法などの点から比較考察することで，London が語った「動物作家」に対する「抗議」の内容を明らかにしたい。

２．J. D. Salinger の作品におけるネイティヴ・アメリカン表象をめぐって――短編“The Laughing Man”を中心に

神戸大学（院）　尾　田　知　子

J. D. Salinger（1919-2010）の作品における東洋の影響および東洋表象は，既に数多くの批評家たちによって指摘されている。しかし，同じく西洋社会における周縁的存在であるネイティヴ・アメリカンの表象に関しては，ほとんど論じられてこなかった。本発表では，没後６年を迎え，新たな伝記の出版を機に再評価の気運が生まれている Salinger 作品を，ネイティヴ・アメリカンとの関係から再考する。

例えば，*The Catcher in the Rye*（1951）では，主人公 Holden がアメリカ自然史博物館の「インディアン女性」の展示へ親近感を抱く。これは，David Shields と Shane Salerno の伝記 *Salinger*（2013）で指摘されるように，第二次世界大戦中に Salinger が激戦地で死に瀕しながら，自然史博物館のネイティヴ・アメリカンの人形を思い出していたという伝記的事実に裏打ちされている。すなわち，アメリカ主流社会の中で周縁化されてきた Salinger/Holden が，同様に周縁化された存在としてのネイティヴ・アメリカンに，自らの存在を重ね合わせているものと思われる。

さらに，自選短編集 *Nine Stories*（1953）の４番目の短編“The Laughing Man”では，語り手の少年が所属する少年団 The Comanches を率いる男子大学生の呼称が Chief，つまり「団長／酋長」であることから，ネイティヴ・アメリカンとの関係を読み取ることは可能であろう。また，低身長，胴長，黒髪，大鼻などの身体的特徴を持つ Chief は，ユダヤ系である Salinger の分身として描かれていると思われる。Chief は，放課後のクラブ活動の行き帰りのバスの中で，少年団を喜ばせるために物語を語る。物語の中で，西洋人宣教師の子でありながら中国人の盗賊に拉致された上に，顔かたちを醜く変形され，その醜い顔を隠すために一生マスクを付けて生きることを余儀なくされた正義の盗賊 Laughing Man を登場させる。少年団員は皆，高貴なフランス社会を騒がす盗賊 Laughing Man の活躍の物語に心を躍らせていた。けれども，恋人と思しき白人女性 Mary Hudson と破局した Chief は突如，フランス人探偵 Dufarge 父娘の罠に嵌まった Laughing Man の最期を少年団に語る。つまり，Mary によって象徴される白人中心の主流社会によって拒絶され，自暴自棄になったネイティヴ・アメリカンの Chief が，その alter ego である Laughing Man を，周縁化された自己と同一化し，自らの身代わりに「殺した」と考えられる。

しかし，本発表では，短編の結末で，少年の心の中に存在し続けることが暗示されている Laughing Man が，西洋人でありながら東洋的周縁性を背負わされた hybrid な存在であることに着目し，短編“The Laughing Man”を再読する。ネイティヴ・アメリカンの Chief の物語の中で，Laughing Man の hybridity が，西洋／非西洋，あるいは白人／マイノリティという，アメリカ社会の支配構造の根底をなす二項対立を攪乱しようとしていることを検証したい。加えて，そこから，ユダヤ系作家 Salinger による排他主義的アメリカ主流社会に対する批判が読み取れることを指摘したい。

司会　井　川　眞　砂

３．Mark Twain の Mysterious Stranger と“How to Tell a Story”――“The Chronicle of Young Satan”を中心に

京都大学（院）　美濃部　貴　子

Mark Twain（1835-1910）は，晩年の約11年（1897年から1908年）に渡りストレンジャーをテーマとする一連の原稿を少なくとも三度書き直した。そして現在，*The Mysterious Stranger Manuscripts*（1969）には３種類の原稿が収録されている。この３種類の原稿はストレンジャーを主題にしているものの，設定舞台や年代，物語の内容は異なる。特に第２稿の“Schoolhouse Hill”は短い断片で終わっており，故郷ハンニバルを舞台に Tom Sawyer と Huck Finn が登場し，他の２つの原稿とは異質である。第１稿の“The Chronicle of Young Satan”と第３稿の *No. 44, The Mysterious Stranger* では，舞台は同じオーストリアにある架空の村 Eseldorf だが，年代は第１稿では1702年であるのに対して，第３稿では中世の1490年に遡る。ストレンジャーの設定も，Satan を叔父に持つ Young Satan に対し，素性の知れない No. 44 である。しかしながら，第１稿のストレンジャーの描写には，第３稿のストレンジャーへと引き継がれた要因がみられる。この要因を詳細に検証することで，Twain の描こうとしたストレンジャーの像がより明確に解釈できる。また，第１稿は物語の途中の第11章で突然終わっている。一方，第３稿は Twain 自ら The End と記した原稿である。つまり，第３稿を完結版とみなすと，第１稿がなぜ未完に終わったのか，ストレンジャーに関して Twain が不満とするところが見えてくる。

Twain の後期作品について，従来の批評の多くは私生活における不幸を大きく取り上げ，作品を悲観的なものと捉えてきた。事実，“Young Satan”に着手した頃は，長女 Susy が24歳の若さで亡くなった直後であり，また三女 Jean がてんかんと診断され，妻 Olivia の体調も悪化していた。しかし，近年の研究では Twain の厭世観が執筆の原動力になっていると肯定的に主張する論考がみられる。Michael J. Kiskis は“Mark Twain and the Accusing Angel”（2009）において，この時期の Twain の環境を *The Book of Job* に例え，“Young Satan”において Twain は自身の不安をペンに訴え，人と神との関係を問いただしていると論じている。また，*No. 44, The Mysterious Stranger* の結末におけるメッセージを楽観的に解釈する研究もある。一方，執筆力の衰えない Twain の一番の特徴を考えれば，早い時期から高い評価を得て開発してきたユーモアの観点からテクストを考察することは有効である。そして，Young Satan は物語中，まるで作者 Twain を代弁しているかのように，「笑いこそが滑稽な制度を吹き飛ばしてしまう武器であるのに，人間はその武器を錆び付かせている」と断言し，ユーモアのセンス（the sense of humor）について論を展開している。James M. Cox は *Mark Twain: The Fate of Humor*（1966）において，Twain にとってユーモラスな笑いが重要であり，Young Satan の笑いは風刺的な笑いであると主張する。しかしながら Cox 以降，ストレンジャーの原稿をユーモアの視点で考察している研究は少ない。また，同時期に出版された“How to Tell a Story”（1897）では，ユーモラスな物語はアメリカのものとしてその語り方を Twain は論じており，分析する上で重要な作品となっている。

以上のような背景を踏まえて，本発表では，未完で終わった第１稿の“The Chronicle of Young Satan”を中心に，“How to Tell a Story”（1897）での「ユーモラスな物語」とストレンジャーの関係を考察する。また，完成版の第３稿 *No. 44, The Mysterious Stranger* と比較検討し，Twain が描こうとしたストレンジャーを解明したい。

４．Mark Twain は不倫を肯定したか，あるいは『自伝』の真意

就実大学　和　栗　　了

Mark Twain は社会的道徳に反する男女の性的関係あるいはそれに近い問題を *Autobiography*（以下『自伝』）で何度か扱っている。Harry Kendall Thaw の妻の不幸な事件を取り上げているだけでなく，Twain の家族の周辺にも疑わしい事件があった。Twain の少年時代にもそうした関係があったことが確認されているし，Connecticut 州 Hartford の家でも使用人による秘密の男女関係が発生していた。『自伝』以外では，*The Gilded Age*（1873）で Laura Hawkins が南部連合軍の George Selby に騙される話を書いた。Twain 自身も晩年に雇った秘書 Isabel Lyon との関係を疑われている。さらに晩年の Twain が複数の少女と不適切な関係にあったと疑う研究者もいる。

だが，Twain はそうした関係を一貫して否定してきた。彼の断固とした姿勢は不変だ。Missouri 州にいた時も，そうした関係を疑われる男性を攻撃した。Thaw の妻 Evelyn Nesbit の事件についても，一貫して Stanford White が悪いと考えていた。Twain が女性に厳しい考えを抱くこともあり，義理の叔母になる Ella Evelina Hunter をよくない女性だと考えていた。

こうした問題に対して Twain が不明瞭な態度を示した例がひとつだけある。Henry Ward Beecher の例である。Twain はこの牧師を攻撃してはいないが，同時に擁護もしていない。むしろ彼を攻撃した妹 Isabella Beecher を，その自由な恋愛観ゆえに拒否している。この点でも Twain の保守性は一貫している。Twain は，結婚前の自らの経験を例外として，結婚外の男女の関係を否定していた。

Twain が晩年に書いた未出版作品“Wapping Alice”は Hartford の家で1874年から75年にかけて起きた，使用人の未婚女性の妊娠疑惑事件をもとにしている。これは最終的に『自伝』に収録された。実際の結末は，若い二人が Twain の策略で結婚し，成功し，幸福になる，だった。だが，作品としてこの短編は同性愛の可能性を持ち，異彩を放っている。さらに『自伝』では，これが Twain による人助けの話になった。つまり，Twain は“Wapping Alice”の結末をどうするか迷ったのである。

今回問題としたいのは，この作品の結末での Twain の迷いである。事実をそのまま書けば感動的な話になったはずだ。ところが彼はその結末部分を男性同性愛の話に変えることで，保守的姿勢では一貫しながらも，ただの笑話とした。この笑話の掲載を拒否したのは，

New York *World* 紙の James J. Tuohy, *Cosmopolitan* 誌の John B. Walker, *Harper's Monthly* 誌の Frederick Duneka である。彼らの判断は正しかった。読者は，意味のよくわからない，女性性とは何か，男性性とは何か，結婚とは何かを問題にする作品を Mark Twain に求めはしなかった。Twain はこれらの掲載拒否により目が覚めた。自分に求められているのは笑話を書くことではなく，攻撃的でありかつ保守的な Mark Twain 像の創造だと彼は目覚めた。

Twain の『自伝』の目指すものは，おそらくアメリカ合衆国の読者に永遠に受け入れられる虚構としての Mark Twain の創造であり，不可解な物語ではなかった。もちろん彼はそれに成功し，保守的 Mark Twain は現代にも受け入れられた。その Mark Twain 像を男女の関係から論ずる。

第３室（ノートルダムホール本館２階　209ND）

司会　三　杉　圭　子

1．John Dos Passos の伝記と時代小説におけるジェファソニアン・リベラリズムと自己統治

関東学院大学（非常勤）　千　葉　洋　平

U.S.A. 三部作（1938）の成功によって，1930年代におけるアメリカの左翼文芸運動の代表的な作家とされた John Dos Passos は，共産党に幻滅し，「改心」をしてリベラルなスタンスへと転回した代表的な人物ともされている。「改心」以降の Dos Passos の時代小説や伝記は，同時代的には一定の評価を得てきたが，その後の大学における文芸批評や歴史研究において驚くほど言及されてはこなかった。一方で例えば，*On Native Grounds*（1942）の終章で Alfred Kazin は，Dos Passos の *The Ground We Stand On*（1941）を1930年代の伝記や WPA のガイド・ブックに見られる Americanism への関心と結び付け，彼の伝記を「盲目で偏狭的なナショナリズム」ではなく，「西洋文化の宝庫」の再発見から生まれる新しいナショナリズムとして位置づけている。しかし他方で，観念としての「アメリカ」が第二次世界大戦中，戦後における文化研究を通じて形成されると，Dos Passos の作品群は，その独自性を失い，現代の私たちの視座からすれば，反共と自由を盾とし，公平無私で非政治的な芸術を武器とする冷戦リベラリズムの一例にも見えてしまう。

もちろん政治性や歴史性から距離をとり「自由」を全面に打ち出すリベラルな態度は，それ自体が歴史的な文脈に依存をしており，ある種の利害や権力の上に成り立っていると批判できるかもしれない。しかし Amanda Anderson が論文 "Character and Ideology"（2011）で指摘するように，このような批判は，「リベラリズムは（複数の中の）ある特定のイデオロギーではなく，それが単にイデオロギーそのものである」としているに過ぎない。つまり反対するものを措定し，自らを妥当な立場に置く態度は，リベラリズムだけではなく，いかなるイデオロギーにも言えることなのである。Anderson の指摘は，リベラリズム自体が多形的であることだけではなく，Dos Passos の伝記や時代小説自体がある種のイデオロギー批評の限界への応答であることを示唆している。

以上のことを踏まえた本研究発表は，Dos Passos の *The Ground We Stand On*, *The Grand Design*（1949），*The Head and the Heart of Thomas Jefferson*（1954）を中心に取り上げ，自由の必要性を Dos Passos 自身が認識した時代背景を分析すると同時に，伝記の題材となる Jefferson に体現されるリベラリズムを明らかにする。彼の作品は，全体主義への反感とアメリカ独立期へのノスタルジーに満ちた作家の「保守的」思考を表すものではない。作品の重要性は，理念や想像力を物質へと変換させる実践とその影響を，様々な技法を使い表そうとすることにある。また *U.S.A.* 三部作から引き続き，彼の技法は，テクノロジーによってより強大で非人間的になった統治機構への対抗措置であるだけでなく，そのテクノロジーに関わる「新しい階級」に対して自己統治の可能性を示すものである。最終的に本論は，Dos Passos の議論を冷戦期のリベラリズムが内包する複数の問いに位置づけることで，正しい政治的位置を確保する以外の政治的応答可能性を論じる。

司会　杉　野　健太郎

2．Passing Gatsby, Queering Clare ——モダニズム文学における "tragic mulatto" の主題とセンチメンタリティ

上智大学　ハーン小路　恭子

Walter Benn Michaels の *Our America*（1995）におけるネイティビズムについての論考以降，白人男性作家中心のモダニズム文学が人種，階級，セクシュアリティについての偏見を露呈していることは批評における一種の前提となっている感があるが，たとえば F. Scott Fitzgerald の代表作 *The Great Gatsby*（1925）などは，あからさまな男性中心，白人中心，ワーキングクラス嫌悪の思考が見られるにしろ，むしろ主人公である Gatsby は他者的な一切のものに対して開かれた存在としての側面を持ってもいる。1920年代のモダニズム文学が描いたアメリカは，単に Tom Buchannan 的な白人ネイティビストから見た閉所恐怖症的な世界ではなく，さまざまな他者性がせめぎあう一種の文化的コンタクト・ゾーンでもあるのだ。

モダニズム期の文学をそのように混交性に満ちたものとして再解釈する上で本発表が論じたいのは，*Gatsby* ならびに他の同時代のモダニズム文学が感情やセンチメンタリティをどう扱っているかという問題である。一般的にモダニズムの表現は，前時代的な感傷を否定する傾向にあるものとして理解されているが，Suzanne Clark や舌津智之の仕事はモダニズムにおける抑圧された感傷もしくは抒情が回帰する様を明らかにしているし，近年の Lauren Berlant の刺激的な論考は19世紀以来のセンチメンタルな女性の語りが現代アメリカ大衆文化においても "unfinished business" として繰り返し現れることを批判的に検証している。本発表はこれらの批評群を下敷きとしつつ，19世紀以来のアメリカ文学の語りの伝統としてのセンチメンタリティがモダニズムの時代にどのように変奏されているかを考察したい。

その際中心となるのは，*Gatsby* と，同時代に書かれたハーレム・ルネサンスの代表的作品のひとつである Nella Larsen の *Passing*（1929）との比較的読解である。並べて読まれることがほとんどないにもかかわらず，この二作品は驚くほど多くの共通点を持っている。どちらの作品も一見冷静で客観的なモダニスト的語り手／視点人物（Nick Carraway / Irene Redfield）を採用しつつ，最終的にはその語りの客観性が，潜在的に危険だが魅力的でもあり，また過度に感情的／感傷的な人物（Jay Gatsby / Clare Kendry）との出会いを通じて崩壊していく様を描いている。また，いずれの作品もその批評史が証明しているように，人種的パッシングの物語としても，セクシュアリティにおけるパッシング，つまりは隠された同性愛の主題を持つものとしても読むことができる。本発表は二作品における人種とセクシュアリティの主題の近接性あるいは混交性を，具体的にはセンチメンタル・ナラティブの派生ジャンルとしての "tragic mulatto" のモチーフが二作品にどのように表れているかを見ていくことを通して考察し，センチメンタル・ナラティブがモダニズム期のキャノニカルな作品においてどのように展開されているのかを検証したいと考えている。

司会　上　西　哲　雄

3．"You can't live forever" —— *The Great Gatsby* における Wilson 夫妻と消費社会

龍谷大学（院）　越　間　将　平

本発表では，F. Scott Fitzgerald の代表作 *The Great Gatsby*（1925）における２人の登場人物 Myrtle Wilson と George Wilson を，作品の舞台である1920年代初頭のアメリカ社会というコンテクストにおいて分析していきたい。「灰の谷」の自動車修理工場に暮らす夫妻 Myrtle と George は，これまであまり分析の対象とされることはなかった。Fitzgerald Revival ともいうべき Fitzgerald 文学の再評価が始まった1950年代以降，多くの批評家は主人公 Jay Gatsby や語り手 Nick Carraway の重要性について論じてきた。国内ではおそらく初めてとなる，Myrtle を本格的に扱った今村楯夫の論文「マートル・ウィルソンの悲劇：ギャッツビーの影で」（2002）のタイトルが端的に示しているように，Myrtle も George も「ギャッツビーの影で」隠れた存在であり続けているのかもしれない。

1920年代初頭のアメリカは Roaring Twenties と呼ばれる時代の渦中にある。第一次世界大戦に勝利したことによって未曾有の好景気に恵まれたアメリカは飛躍的な経済成長を遂げ，大規模な消費社会が形成された。旧来支配的であった道徳的・倫理的規範を重視するピューリタン的価値観や生活様式は廃れ，人々は積極的に消費者行動に勤しむようになった。大量生産・

大量消費が促進される資本主義社会の側面を，あるいはこのような社会における人々の様々な側面を Fitzgerald は *The Great Gatsby* に描き出している。

本発表で注目する Myrtle と George は他の主要登場人物の脇役に甘んじてはいるが，消費社会という枠組みの中で捉えることに大きな意義があるように思われる。２人は「灰の谷」という，いわば経済・文化・社会的発展から取り残されているかのような土地にあって，消費者として都心部を中心とした消費社会に強く関わりを持とうとしているかのようだ。うだつが上がらない夫 George との夫婦生活に嫌気がさし，イースト・エッグ在住の富豪で不倫相手の Tom Buchannan との結婚を目論む Myrtle の，第２章におけるパーティでの（あるいはパーティへ向かう途中の）描写はその好例であるといえるかもしれない。George も自動車修理工場を経営し，Tom が所有する車を買い取らせてもらえるようしきりに Tom に懇願しているという点で，消費社会に関わろうとしているかのように見える。しかしながら２人のこのような行動も空しく，Myrtle は Tom との結婚，George は Tom の車の買い取りという念願を果たすことができないまま作品終盤で悲劇的な死を迎えることになる。

本発表では，Myrtle と George を消費社会との関連で分析し，最終的には「灰の谷」で起こる悲劇がその文脈においてどのような意味を持ち得るのかを検討してみたい。American Dream というテーマと分かちがたく結び付けられている Gatsby の悲劇に比べて軽視されがちではあるが，この脇役たちの悲劇もまた決して看過されるべきではないだろう。消費社会における人々の一側面を照射する可能性がそこに秘められている。

４．“Winter Dreams”再読

龍谷大学（名）　藤　谷　聖　和

F. Scott Fitzgerald の短編“Winter Dreams”(1922) のストーリーにはいくつかの矛盾がある。原因は作者の過剰なまでの加筆・修正である。雑誌掲載の作品を短編集に集録する際の加筆・修正はよく知られているが，初出の雑誌掲載の際にも校正の段階で多くの加筆・修正を施している。代理人 Harold Ober が校正原稿にも携わっていたならば防げたと思われるミスがいくつか捉えられる。これまで，この作品のストーリーの矛盾が指摘されてこなかったので敢えてそれらを指摘し，指摘されてこなかった原因を探る。

主人公 Dexter と，彼が恋に陥るフラッパーの Judy の最初の出会いの際に二人の年齢差は２歳であるが，最終章では５歳差になっている。10年後，二人の交際が始まり，Dexter はすぐにふられる設定になっているが，このエピソードには二種あり，作者の加筆・修正の跡が窺われる。二人の交際が始まるきっかけは“harvest moon”に照らされる湖上での出会いで，翌日，彼女のサマー・ハウスに招かれて交際が始まる。１週間後，二人は野外パーティに参加するが，彼女は他の男性とどこかに行ってしまい Dexter は自分は彼女を取り巻く男性の一人にすぎないと認めざるを得ない，つらい洗礼を受ける。ところが，ストーリーの展開につれて，冬になってふられた事件を思い出すシーンでは，そのふられた時期が「８月」で，ニューヨーカーの登場で楽しかった３日間が終わるエピソードとなっており，全く別物である。“harvest moon”は「仲秋の満月《秋分に最も近い満月》」なので，交際が始まる以前の８月にすでにふられているということになってしまう。

初出の *Metropolitan* 版では，これまで Judy のサマー・ハウスを訪れた男性についての描写があるが，３箇所もあり，章が変わっても続いている。さすがに，短編集版 *All the Sad Young Men* (1926) では１箇所に絞られている。同じ描写の繰りかえしは Judy がいかに難攻不落の女性かという性格描写にも捉えられる。異なるパラグラフを挟んで１頁に２箇所もあり不自然である。終章では Dexter が Judy との破局を７年後に回想し，ストーリーの幕を閉じるが，前章の５章でも10年後の回想がある。*Metropolitan* 版でもそうなっているので，短編集集録の際の加筆ではない。掲載時の校正での加筆で，ストーリーとしては不自然である。

Fitzgerald は Hemingway の *In Our Time* についての書評で，彼の文章を「一枚の絵」に喩え，「鮮明で、郷愁をかきたて，しかも緊張感に富んでいる」，「その絵が完成するや、光はふっと消えて，物語は終わる」と作品に印象的な「絵」を捉えている。特に“Soldier's Home”での息子のために祈る母親の姿は印象的であったようで“The Captured Shadow”(1928) で使っている。“Winter Dreams”では，このような「絵」となる描写が多いためか，我々読者はそちらに惹かれて，ストーリーの矛盾に気がつかなかった。アル中になってからの作品 *The Pat Hobby Stories* と比較して，それらの「絵」についても言及したい。

第４室（ノートルダムホール本館２階　208ND）

司会　大　地　真　介

１．浮遊する欲望――Flem Snopes と広告の魔術

奈良保育学院（非常勤）　金　廣　　顕

William Faulkner による The Snopes Trilogy―*The Hamlet* (1940)，*The Town* (1957)，*TheMansion* (1959) の主人公 Flem Snopes については，貪欲で狡猾な侵略者という見方が一般的であった。Flem を南部社会に予め潜在していた害悪の触発者と位置付ける Joseph Gold の研究や，以前から Frenchman's Bend を支配していた Will Varner の手法を継承し，経済的搾取の原理を徹底した模倣者として解釈する Frances Louisa Nichol の研究のように，彼を中立的に捉える研究はあるものの，それらは依然として Flem を非生産的で冷酷な成り上がり者としてのイメージに留めている。しかし Flem が Frenchman's Bend から Jefferson に進出し，富を築いていく過程を注視すると，彼の手法に近代的広告の先駆性を認めることができる。本発表の目的は Flem が Frenchman's Bend や Jefferson の人々に巧みに物を売りつけ，やがては自身もカタログ販売される商品を購入するようになる諸エピソードを精査することで，そこに20世紀初頭から興隆してきた広告の手法との類似点を指摘し，最終的には Faulkner が三部作を通じて描き出そうとした消費社会の特質を明らかにすることである。

Flem が Frenchman's Bend に登場する20世紀初頭は，アメリカにおいて消費の意味が大きく変容する時代であった。浪費する，枯渇させるといった否定的なニュアンスが強かった「消費する consume」という言葉が肯定的な意味を帯び始め，使い切ることとそれを作り出す需要が繁栄に直結すると理解されるようになったのである。それに伴い広告も単なる商品の説明から消費者の心理を意識した近代的広告へと洗練されていく。社会が生産者重視から消費者重視へ徐々に移行したことで，広告も未知のものに対する人々のイメージや欲望を操作するようになったのである。

The Hamlet での斑馬の競売エピソードや Old Frenchman Place を Ratliff たちに買わせる取引において，Flem は本来価値のない物を魅力的で市場価値の高い商品に見せることで人々の欲望を喚起しており，J. R. Dolan が20世紀初頭の革新的な広告の手法として分析した，「ありきたりの品物を魔力の輝きで包み込む売り方」に成功していると言える。また *The Town* においては Flem が銀行の副頭取の地位を得たのち，カタログから購入した室内装飾品が戯画的に描かれる場面があるが，そこからは共同体における respectability を得たいという欲望ゆえに，中産階級の理想像を提示しながら購買へと誘い込む広告の魔術に，Flem 自身が呑み込まれていく様子が看取されるだろう。こうした諸エピソードの先に見出されるのは，主体が理想とする像を提示し，配布することで欲望を喚起しながら，結局は主体を充たすことがないゆえに欲望の対象を再補填し続ける消費社会の姿である。

司会　早　瀬　博　範

２．Dilsey のテクスト――*The Sound and the Fury* における Gibson 家の物語

徳島文理大学　山　本　義　浩

３世代に渡る Compson 家の物語が描かれる *The Sound and the Fury* において，黒人召使である Gibson 家の家系図を把握するのは容易ではない。Thadious Davis が白人男性中心主義と批判する“Appendix Compson: 1699-1945”においても，Gibson 家の人々に割かれる紙面は僅かであり，Michel Gresset が Compson 家の時間を垂直的とする一方で黒人のそれを水平的と見なしたように，黒人たちから歴史は奪われている。しかしこの作品が，Compson 家の乳母である Dilsey を通じて南部社会の重層的な時間を獲得していることは間違いない。平石貴樹が述べる，Benjy と Dilsey の二重構造によって作品世界にもたらされる「クロノス的なカイロスの悲劇」が創出されるためには，意識の流れを前提とする第１章から第３章までの一人称の語りに対し，それらを統合する第４章の三人称の語りが必要とされる。それ故に，Compson の兄弟たちが個別に経験した出来事が Compson 家の悲劇として意味を成すうえでも，Dilsey は極めて重要な役割を担っている。

第４章を構成する Dilsey と Jason によるダブルプロットは，Compson 家の物語が Gibson 家の物語との相互補完性によって初めて成り立つことを示している。Benjy の世話をする Luster を始め，Gibson 家の人々は作品全体を通じて Compson 家の兄弟たちと関わっており，中でも Dilsey は南部家父長制を支える

女主として位置づけられる。第１章から第３章において一人称の語り手である兄弟たちが Caddy の喪失を想像的に回復せんとして果たせないのに対し，第４章における Dilsey は，Easter を契機として個人の物語を共同体に接続する。南部の歴史的・文化的な結節点として Gibson 家を考える時，Shegog 神父の説教を通じて“I've seed de first en de last”との認識に至る Dilsey から逆照射される Compson 家の衰退は，再建期の社会変化を示す家族の肖像に留まらず，後に Faulkner が本格的に取り上げることになる南部の過去へと至る道を準備していると言ってもよい。

Faulkner が創造した架空の土地 Yoknapatawpha 郡は，Édouard Glissant によれば，父祖伝来的な共同体を渇望しつつも決してそれには達し得ない場所である。南部貴族の高踏的遺風は家長であった Mr. Compson と長男 Quentin の死によって絶え，新たな家長となった Jason は姪である Miss Compson に財産を奪われる。零落しつつある一族を見守る Dilsey の過去は決して語られないが，語り手たちの時間から逃れ去った Caddy とは対照的に，時の蓄積が刻まれた身体，紫のガウン，軍用のコート，色あせたキャラコのドレスといった表層には，読み解かれるべき物語の潜在性が宿っている。本発表では，これらを Dilsey のテクストとして再構築し，第４章における時間の主題へと議論を深めたい。

３．*The Sound and the Fury* の“Appendix”の歴史主義と「少女の泥の付いた下着の尻」のセクシャリティ

専修大学　並　木　信　明

1945年，編者 M. Cowley は *The Portable Faulkner*（1946）に *The Sound and the Fury*（1929）の第４部だけを収録することを決め，Faulkner は読者の便を図り“Appendix”を書いた。しかし白人が定住する以前のインディアンの族長や冷酷なインディアン政策を断行した Andrew Jackson 大統領の説明に始まり，Scotland の Culloden Moor の戦いに敗れてアメリカに逃亡した先祖を持つ Compson 家年代記の内容は，従来からのこの作品の読者の理解を深めるよりも困惑させることが少なくなかった。

The Sound and the Fury の第１部（Benjy section）は，出版の道を断たれた Faulkner が，何のプランもなく，本を書く意識もないまま，まるで古代ローマ人が愛玩した vase（花瓶・壺）を作るように完成させた，と生前未発表の序文の中で述べている。現在と過去の様々な場面からなる idiot の意識の世界はそれ自体で完結した美術品のようで，背景が説明されない読者には理解しがかったため，さらにそれについて長男 Quentin，次男 Jason そして作者自身が語る必要があったと説明している。

The Sound and the Fury のおよそ15年後に書かれた“Appendix”は，*Absalom, Absalom!*（1936）や *Go Down, Moses*（1942）といった Mississippi 州 Yoknapatawpha 郡 Jefferson の，19世紀初頭の草創期に関係する作品群の歴史主義の影響を受けて歴史的背景を加えると同時に，Faulkner 自身の家系の歴史を反映している。著名な父方の曾祖父 William Clark Falkner よりもむしろ母方の血筋の影響を受けて，Scotland 出身の出自が強調され，敗走と夜逃げの傾向などが長々と語られるのが“Appendix”の特徴である。

Absalom, Absalom! では，インディアンから購入した土地に大荘園 Sutpen's Hundred を築いた男が，黒人の血筋という難題と南北戦争という災禍によって子孫と屋敷を喪失する一代記が描かれる。他方，*The Sound and the Fury* の“Appendix”は本編に，インディアンから密かに譲渡された土地に荘園を築いた Compson 家が，知事や将軍を輩出して頂点を迎えるが南北戦争後衰退が始まるという前史と，長男が自殺し，長女が不名誉な離婚をし，次男が家屋敷を放棄して Compson 家の歴史が閉じ“Compson's Place”という呼称だけが残るという後日談を付け加え，Compson 家の盛衰史に仕立て上げて，「Caddy と娘という誤れる２人の女性の悲劇」を歴史化している。

空前絶後の文学原理に則って書かれたこの作品に対する，語りと歴史主義的傾向を強めた15年後の Faulkner による再構成の試みを分析しつつ，彼が作品の礎とする Caddy の泥で汚れた下着の尻のセクシャリティとその歴史的意味について考察したい。

４．セッションなし

第５室（ノートルダムホール本館２階　206ND）

司会　岩　田　和　男

１．Edna Ferber の *Giant* と George Stevens による映画化作品の比較考察――ジェンダー的，階級的，人種的な被抑圧者たちの表象に焦点を当てて

京都大学（院）　西　岡　かれん

1910年代から60年代にかけて小説家・劇作家として活躍した Edna Ferber は，*So Big*（1924）でピュリッツァー賞を受賞したものの，作風が大衆的だとして，批評家たちから芳しい評価を得てこなかった。F. Scott Fitzgerald は，Ferber の小説に，「O. Henry のイディッシュ系の子孫」というレッテルを貼り，ユダヤ系である彼女の出自や作風に嫌悪感を示した。

そういった批評家たちの評判とは裏腹に，Ferber の小説は当時こぞってハリウッドで映画化され，興行的に大きな成功をおさめた。特に *Cimarron*（1931, 1960），*Show Boat*（1936, 51），*Giant*（1956）は，未だに名作としての評価を得続けている。Ferber の作品群が大衆の心をつかみ，また映画化の際に大きく話題になったのはそれらが，フェミニズムや階級，人種，エスニシティの観点からアメリカの文化的アイデンティティに迫ったものだったからである。Ferber が社会的に抑圧された者たちの描写に関して殊更敏感だったのは，自身もまたマイノリティとしての自覚を持ったユダヤ系の女流作家であったためであろう。

今回は，Ferber の後期の作品である *Giant* を取り上げ，同名の George Stevens 監督による映画化作品との比較考察を加える。*Giant* は出版当初，テキサスにおけるメキシコ人差別をあからさまに描いたことで，大きな議論を引き起こした。のちに石油王となるプアホワイトの使用人 Jett Rink は，小説の中ではアフリカ系アメリカ人やメキシコ人との類似が顕著で，地位の低い白人と被差別者であった他人種との境目の曖昧さが強調されている。J. E. Smyth は，*Edna Ferber's Hollywood: American Fictions of Gender, Race, and History* の中で，Jett Rink が真っ黒な石油を全身に浴びるシーンを取り上げて，Ferber が黒人たちと Rink の立場上の類似を強く意識していたと指摘している。また，革新的な東部からテキサスの大牧場に嫁ぎ，そこでの女性の地位の低さに戸惑いを隠せない主人公 Leslie Benedict を通して描かれるジェンダーの問題は，小説の中で中心的な要素となっている。

この作品がハリウッドで映画化される際に，製作者側は小説の中にある過激なメキシコ人差別に関する描写や，Leslie のフェミニスト的なセリフなどを削って，より多くの人に受け入れられやすい作品を作ろうとした。

Stevens は，Ferber が重視したフェミニズムや人種差別の問題に共感的な部分もあったものの，*Shane*（1953）で自身が描いたような西部劇的な男性性への憧れもあり，Jett Rink や Bick Benedict に古典的な西部劇型のヒーロー像を託した。Ferber は映画の脚本への介入を希望したが，以上のような事情から製作者側との溝は深まっていった。

このような対立はあったものの，Stevens の作品は，John Ford による *The Searchers*（1956）などの人種差別を扱った映画や，家庭で鬱屈する女性を主人公とした映画が同時代的に制作されていたハリウッドで，女性や有色人種，地位の低い白人などの被抑圧者の描写の方向性に大きな影響を与えた。Leslie を演じた Elizabeth Taylor や，Jett Rink を演じ，当時夭折して話題をさらっていた James Dean らのスター・イメージを受けて，映画の登場人物たちはロマンチックでメロドラマ的に描かれ，Ferber の意図した社会的なメッセージ性は弱められたが，男性キャラクターを小説よりも丁寧に描くことにより，映画はジェンダーの問題をより相対的に捉えている。当発表では小説と映画を比較し，その被抑圧者たちの描写がどう変化しているかについて論じたい。

２．Ann Petry の *The Narrows* における人種・ジェンダー・冷戦

日本大学　平　塚　博　子

Ann Petry（1908-1997）は，アフリカ系で労働者階級のシングルマザーを主人公にした小説 *The Street*（1946）によって，アフリカ系女性として初のミリオンセラーを出した作家である。ニューイングランドのアフリカ系の中流家庭に育った Petry は，結婚を期に1930年代後半からハーレムに移り住み，そこで労働者階級を含む様々な階層のアフリカ系の人々の生活に触れる。ハーレムで約８年間，作家，ジャーナリスト，活動家として人種問題を含む様々な社会問題の改善と芸術活動の発展に取り組む傍ら，Petry はそこでの経験を *The Street* をはじめとする作品として結実させていく。生涯を通じて Petry は，小説に加えて詩や評

論さらには児童文学という多岐にわたるジャンルの作品を発表した。社会派リアリズムの手法を用いることから，しばしばリチャード・ライト派に分類されるものの，Petry の作品はライト派の枠組みには収まらない独自性と異彩を放っている。Petry の創作および思想における多彩さは，アフリカ系の文学史そして歴史において重要な位置を占め，Petry は近年その作品および思想について再評価が進められているアフリカ系女性作家の一人といえる。

Petry の３作目にして最後の長編小説となる *The Narrows*（1953）は，ニューイングランドのアフリカ系の共同体を舞台に，アフリカ系青年と白人女性の異人種間恋愛をテーマにした作品である。この作品は発表当初もその後も *The Street* ほどの注目を集めてはいないものの，作品がアメリカの民主主義の本質が切迫感をもって問われた冷戦初期に執筆されたという点を踏まえれば，*The Narrows* は Petry の作品と思想さらにはアフリカ系文学と歴史を考える上で重要な作品といえる。本発表では *The Narrows* を取り上げ，冷戦初期のアメリカというコンテクストにおいて Petry がこの作品において人種とジェンダーの問題をいかに掘り下げているかを検証する。この作品は，Petry 自身としてはハーレムから故郷コネチカットに居を移し，国内では公民権運動が1954年のブラウン判決を始めとする歴史的な動きにむけて大きく展開する一方で，マッカーシズムによって Petry の友人の多くも赤狩りの犠牲となった時期に執筆された。本発表では，*The Narrows* が，殺人という結末を迎える悲劇的な恋愛物語を通じて，人種とジェンダーが複雑に交錯するリンチやレイプ神話といった歴史を想起させつつ，冷戦初期アメリカの民主主義の本質を問うテクストであることを明らかにする。さらにこの作品で Petry が提起する人種やジェンダーの問題を，アフリカ系の文学と歴史及びアクティヴィズムとの関連で検証することで，その意義についても考察してみたい。

司会　Matthew Theado

3．'Time' and Its Various Forms in Robert E. Howard's Fantastic Stories

徳島大学　Dierk Günther

'Time' and 'History' are two elements appearing throughout Robert E. Howard's stories, transcending the different genres in which Howard wrote, ranging from historical fiction, horror and weird western stories to fantasy stories. 'Time' and 'History' are also connecting Howard's fantastic stories to such an extent, that this body of his literary work can be read as a 'complete works'.

'Time' and 'History' are most obvious in the pseudo-historical essay 'The Hyborian Age', in which Howard combined anthropological and archaeological theories with Theosophist ideas.

But 'Time' and 'History' are also represented in the following forms in Howard's work:

(1) 'Reincarnation' and 'Racial Memories': The story's protagonist tracing his former selves over the abyss of time.

Influenced by Jack London's story 'The Jacket' Robert E. Howard started a series featuring the modern day Texan James Allison, who has the ability to remember his former reincarnations. With this Howard managed to create a 'hero with a thousand forms', one character he could conveniently put into any period of time and in any environment. What makes this even more interesting though is that the 20th century protagonist would not only commentate but also interpret the thoughts and motivations of his former selves. Hereby Howard could lend these former reincarnations more 'authenticity' than by simply writing in a third person narrating voice (of a 20th century person).

(2) 'Howard's Weird West': References, allusions, remnants of the 'Hyborian Age linking the Hyborian Age with the history of the American Southwest of the 19th and 20th century.

The 'Hyborian Age' essay is important to understanding and appreciating Howard's body of fantastic stories. Originally written as the background for Howard's most famous series, stories featuring Conan of Cimmeria, elements featured in this essay would also appear outside of these Conan stories. When in the early 1930's Howard wrote horror stories set in Texas and the American Southwest, he did not only use traditional tropes like 'vampires' and 'ghosts', but also integrated elements featured in the 'Hyborian Age' essay. With this, Howard not only linked the pseudo-history of his Fantasy stories to the 'real' world, but also made 'Time' and 'Pseudo'-History' an essential element of his work.

In this presentation these forms of 'Time' and 'History' will be analyzed at first by describing how 'Time' and 'History' were perceived by the early 20th century American society. Then a short overview on the ways in which up to Howard's lifetime other writers in the field of 'fantastic literature' depicted 'Time' and 'History' in their works will be given and contrasted with Howard's pseudo-historical essay 'The Hyborian Age'. Finally examples of the above mentioned forms of Howard's way of depicting 'Time' and 'History' will be given and their differing effects demonstrated.

司会　結　城　正　美

4．Terry Tempest Williams の *When Women Were Birds* にみられる修辞的戦略の系譜

白百合女子大学　岩　政　伸　治

本発表では，アメリカのネイチャー・ライターにしてエコフェミニストである，Terry Tempest Williams（1955-）が2012年に著した作品，*When Women Were Birds: Fifty-Four Variations on Voice* が，Henry David Thoreau（1817-1862）ら19世紀の超絶主義者の作品からビート詩人，現代のネイチャー・ライターまでにみられる，東洋から翻訳されたレトリックを取り入れた言説の系譜にあることを明らかにする。

かつて拙論で，Williams が2001年同時多発テロの体験を描いた短編，"Scattered Potsherds"（*Red*, 2001所収）の言説に，既成の事実だと思われて暗黙の内に了解していた世界の成り立ちについて疑い，否定し，そして受け入れるというプロセスを繰り返しながら核心に迫ろうとする，いわば弁証法的なレトリックが反復されていることを明らかにした。後の発表で，それが作者の意図的な試み，つまり修辞的戦略であることを，Williams が発表した "Commencement"（*The Open Space of Democracy*, 2004所収）本文中で使われている "dialectic" という言葉と文中におけるその役割からの裏付けを試みた。

2012年の日本アメリカ文学会全国大会の発表においては，この弁証法的レトリックの構造に，認識論的立場を超越し，世界が置かれた状況とその環境から正・反・合を繰り返す，いわば場所的，環境的転回を分析する機会を得，その背景に，Williams が Thoreau の *Walden; or, Life in the Woods*（1854）出版150周年記念版の序文中に用いた "koan" という言葉から示唆される禅仏教の弁証法的世界観があることを報告した。

Williams が生前母親に，自分が亡くなった後に開くようにと渡された母親のジャーナルが，いざ母親が亡くなって開いてみると，中には何も書かれていなかったという事実の発見から，謎解きのようにストーリーが展開されていく最新作 *When Women Were Birds: Fifty-Four Variations on Voice* も同じ文脈での分析が可能な作品である。Williams は，本書執筆の背景に，実際に癌で亡くなった彼女の母親が残したジャーナルの存在があることを，数々のインタビューで述べ，これらのジャーナルが美しい "koan" であり，かつて中国で女性同士がひそかに扇子に記してコミュニケーションを図った，男性には隠された女書と呼ばれる秘文字の系譜にあることを文中に示唆している。

本発表ではこのように，Williams の最新作 *When Women Were Birds* においても，禅仏教の弁証法的世界観を取り入れた修辞的戦略と，それにまつわるエピソードの修辞戦略的読み替えが踏襲され，同作品が，東洋から翻訳されたレトリックを取り入れた言説の系譜にあること，またその狙いについて明らかにしたい。

第６室（ノートルダムホール本館２階　205ND）

司会　麻　生　享　志

1．「顔」なき女たち――*V.* と *Gravity's Rainbow* におけるサイボーグ・フェミニズムの可能性

大阪大学（院）　安　保　夏　絵

Thomas Pynchon の *V.*（1963）が出版された1960年代のフェミニズム運動は，既存のアメリカ体制に対抗するカウンターカルチャーの流れに乗じており，女性たちも権利を主張するようになっていた。しかし，当時のフェミニズム運動のなかでも文学活動における女性たちの描写は男性の優位性を強調するだけであり，自立した女性像の確立にあたり困難に直面した作家も多いのではないかと発表者は推測する。

Pynchon はそのフェミニズム批評が直面した問題にとらわれることなく，1960年代に既にそれを超える

フェミニズム批評の可能性を *V.* に託していると言える。人工物と女性を融合した描写はフェミニズムや人道主義に相反するものになりかねない。しかしながら *V.* では，この批判的に思われる女性のサイボーグ化が内包され，両性具有の性質を持ち無機物となる Lady V が男性・女性を問わず両者にとっての人類の脅威として描かれている。Lady V は不気味なヒトや「ヴィーシュー」という名の徴候として1960年代に登場するのだが，彼女の存在は世間が社会的地位の低い女性たちに対して抱くイメージを一転させるはたらきを持っている。

『重力の虹（下）』日本語訳（2014）のあとがきで佐藤良明は，*V.* では「二十世紀の生命世界を，死と無機物が凌駕していく物語が語られる。それなのに，そのプロセスの総仕上げとなった第２次世界大戦期に関しては，ドイツ空軍によるマルタ島の包囲攻撃しか取り上げられていない」と指摘している。第２次世界大戦期に人類の脅威となった V2 ロケットが *V.* では描かれていない。ロケットの脅威は後に発表される *Gravity's Rainbow*（1973）の主人公 Tyrone Slothrop の性的充足とロケット落下の因果関係の描写に引き継がれたと指摘できる。三重スパイの Katje Borgesius は「顔」を隠しながら Slothrop との性行為を行う。Slothrop の Katje との行為を彼とロケットとの一体化のメタファーとしてとらえるならば，アイデンティティーを変容させながら自身の「顔」を隠して生きる Katje もまた Lady V と同様に人類の脅威となっていく。

The Cambridge Companion to Thomas Pynchon（2012）で David Cowart は，*V.* と *Gravity's Rainbow* で描かれているドイツ軍によるヘレロ族の大虐殺を，人々に恐怖感を抱かせる "faceless" な事件であると表現している。この事件で植民地の支配者側であるドイツ軍が "a faceless master" として脅威となっているのだが，国境を越えて共犯関係を結びロケットの開発を進める "faceless" なシステムもまたもう一つの脅威として立ち現れてくる。Slothrop はそのシステムに巻き込まれたがゆえに，「顔」なき女性たちが次々に自分の前に現れてくるのではないのかと疑念を抱きながらパラノイアに陥る。人間，ひいては女性とテクノロジーが共犯関係を結んだシステムのなかで，Lady V や Katje たちは自らの得体の知れない "faceless" な要素を利用し，「顔」を多用に使い分け，「変装」することで大戦期を生き抜いている。

V. から *Gravity's Rainbow* にかけてテクノロジーと女性の間で結ばれている共犯関係は，不可視でありながらも確実に忍び寄る "faceless" かつ脅威のシステムのように描かれている。本発表では *V.* と *Gravity's Rainbow* における「顔」なき女性たちによるテクノロジーとの共犯に着目し，サイボーグ・フェミニズムの可能性を考察する。

２．残像のなかの９・11――*Falling Man* におけるスローモーションの詩学

大阪大学（院）　平　川　　和

スローモーションとは運動の痕跡を残像のように提示する映画的手法だが，近年の Don DeLillo の作品においては，*Underworld*（1997），*The Body Artist*（2001），*Point Omega*（2010）を引き合いに出すまでもなく，この手法が多様なかたちで効果的に用いられている。このことは９・11を題材にした *Falling Man*（2007）においても例外ではない。事件当時，ワールド・トレード・センターの内部で負傷しながらも生還を果たした Keith は，事件後，「ゆるやかな拳」と呼ばれるリハビリ（ゆっくり手首を動かす運動）に勤しむ。Peter Boxall が "*Slow Man, Dangling Man, Falling Man*"（2010）のなかで指摘しているように，Keith にとってこのリハビリは「９・11の狂暴性のなかにある種のゆるやかな平穏を見出すための試み」となり得る。

Boxall は「ゆるやかな拳」を「詩的なジェスチャー」と称しているが，作中でスローを喚起するのは必ずしも身体的動作だけとは限らない。というのも，*Falling Man* では言語もスローを喚起する重要なメディアとなっている。Keith の息子 Justin は単音節語だけで話す方法に没頭するが，Justin 曰く，それは「考える際にゆっくり考える手助けになる」という。David Cowart は *The Physics of Language*（2002）のなかで，DeLillo 作品に登場する子供を Wordsworth の詩に登場する子供に準えながら，子供の言語が「ある世界から別世界への架橋」を可能にすると論じる。この分析のとおり，Keith もまた単音節話法を実践することで物事の深奥を見つめる視座を獲得するに至る。

阿部公彦は『スローモーション考』（2008）において，Wordsworth などの詩に見られるスローな要素を分析しつつ，次のように論じる。「世界を抽象的な言葉で整理して詩が終わるだけでなく，むしろ内向することにより世界が拡がるような感覚がある」。しばしば「詩的」と形容される DeLillo の文体だが，彼もまた言葉が織りなすスローモーションを駆使して，９・11という現象の深奥へと踏み込んでいく。とりわけ，航空機がタワーに激突する瞬間は，映画の一場面のように描かれている。テロリストの視点で描かれる激突直前の機内では，加速しながら通路を転がる水のボトルが，ハイジャック機のスピードを物語る。激突の瞬間と同時に語りの視点がタワー内部の Keith に切り替わるが，一転して彼の目には激突の衝撃で弾む椅子がスローモーションで見える。その後 Keith は，遅々として進まない避難者の列に加わり螺旋階段を降りていく最中，窓の外を斜めに浮遊するシャツを目撃する。このシャツは，タワーから「死」への落下スピードを加速させて「墜ちる男」と，緩慢な速度で「生」への階段を一段一段降りる避難者たちの狭間に垣間見える二つの力学の交渉を，この上なく巧みに表象している。この文脈に引き寄せて阿部の言葉に立ち返れば，「スピードならざる『流動』こそが運動の特質となるとき，あらためて我々は静と動の，また死と生の狭間に迷いこむ機会を得る」ことになろう。

このように DeLillo は，映画のカットのように相関的な速度の切り替えを効果的に用いることで，スローには常にスピードが取り憑いていることを意識させつつ，様々な二項対立の狭間にある境界を攪乱する。本発表では，９・11に取り憑いたスローな残像の軌跡を辿ることにより，身体，言語，思索の３つの観点から，自由落下に抗する DeLillo の「流動」の戦略を明らかにしてみたい。

司会　岡　本　太　助

３．蒐集のアレゴリー――Paul Auster 作品における語りの進行と破綻

大阪大学（院）　植　村　真　未

Beyond the Red Notebook（1995）において Dennis Barone は，*City of Glass*（1985）で Daniel Quinn が所持していた赤いノートが，*The Locked Room*（1986）の Fanshawe にももたらされていることを指摘している。更に，書簡体小説 *In the Country of Last Things*（1987）で語り手 Anna Bloom が手紙を書く契機となった青いノートを例にあげ，ノートという「物」が Paul Auster の作品において物語を展開させる機動力となっていると述べる。しかしこのように作品を駆動させ，その展開と共にメタフィジカルな意味合いを帯びてくる「物品」はノートだけに留まらない。本発表では主に *In the Country of Last Things*，*The Music of Chance*（1990），*Oracle Night*（2003）における物品の蒐集に焦点を当て，それらの物品ならびにその蒐集行為が帯びる寓意的意味合いを探る。

次々に物が無くなっていく，「最後の物たちの国」において Anna は物拾いを仕事とし，生計を立てる。Anna が拾う物は何一つとして原形を留めている物はなく，その物としての機能を果たさない物ばかりである。物としての意味をはぎとられた物品を拾い集め，再生業者へ売却する。そして Anna はそういった日々をノートに書き記すのである。

The Music of Chance における大富豪 William Flower のコレクションも Anna の蒐集物同様，脈絡のない物品の集まりである。電話機，イヤリング，鉛筆，双眼鏡，葉巻等といった諸々の物たちは，語り手 Jim Nashe にとって雑多で意味を為さない物品として映る。しかしながら後の石を積む日々においてこれらの物品が Nashe により突如思い出され，意味を欠いた物品であるが故に彼の心に憑りつくこととなる。というのも，石を積む作業の中でこれらの物に思いを馳せている描写からも明らかなように，元来ヨーロッパの古城であったものを崩し，その石を壁として再建する彼の仕事は Flower の蒐集行為と通底するからである。またこの石を積む行為を Nashe はノートに記すようになり，これは彼にとっての日記となるからである。*In the Country of Last Things* においてと同じく，本作においても脈絡のない物品蒐集は語りと並行して行われる。

Oracle Night の小説内小説である Nick Bowen の物語で Nick が出会うタクシー・ドライバー Ed Victory は，歴史保存局なる機関において電話帳を蒐集している。名前と電話番号のみをアルファベット順に記載した電話帳は，人類の歴史を端的に表しているとは言い難い物質としての文字であり，いわば歴史の文脈をはぎ取られたものである。Nick Bowen 物語の作者である *Oracle Night* の語り手 Sidney Orr は Nick が閉じ込められたところで物語を進めることが出来なくなる。蒐集作業の収束と共に Nick Bowen 物語も終結する。Auster の物語の進行には，常に蒐集という行為が伴うのである。

このように，蒐集という行為が重要な意義を帯びている Auster の三つの小説を分析することにより，蒐集が語りと表裏一体となって連動していることを確認したうえで，本発表では更にこれら三作に共通する殺人や自殺といった破滅的な結末を，アレゴリーを破滅的なものとして論じた Walter Benjamin の論を援用し分析を試みる。独自の秩序を付与された蒐集の行為は，カオスへと回帰する語りの破綻への序曲とも言えるが，過去の生の証が刻まれた物の断片を慈しむことと，未来へ向かって生の証を刻む言葉の断片を慈しむこと，この両者が織りなす繊細な関係こそが，Auster が紡ぐ物語の駆動力となっていたと言うこともできるだろう。

4．変容する語り手——Richard Powers の *Generosity* における「読者」とテクストの融合

大阪大学（院） 三 宅 一 平

幸福の遺伝子を持つとされるアルジェリアからの留学生 Thassa をめぐって展開する Richard Powers の *Generosity: An Enhancement*（2009）では，SF 的仕掛けによって語られる科学と人間の関係性のみならず，「書くこと」をめぐるメタフィクショナルな主題もまた重要なファクターとして前景化されている。その中で特異な様相を示すのが「私」という一人称を伴って語る語り手である。時折使役動詞を用い，作中人物に干渉するこの語り手は「作者」の様相を帯びつつも，作中世界を完全には把握しきれないでいる。創作と観察を同時に行う彼は，まさに作中で話題となる「クリエイティヴ・ノンフィクション」を体現している。

Powers は *Paris Review Book for Planes, Trains, Elevators, and Waiting Rooms*（2004）に寄せた序文において，「本の持つ力は，我々を消し去ったり，制限なく拡張，もしくは縮小させたり，終わりも始まりもなくその内側を循環させたりすることにある」と語っている。この読書観に鑑みれば，読者は本によって他の世界へ誘われ，一時その存在を変容させられる。*Generosity* の語り手は，他の世界としての「ノンフィクション」の世界に言及するが，自らが存在する世界こそが，そこから切り離された「フィクション」であるとの認識も保持している。そのような意味において，この語り手を，「ノンフィクション」の世界から「誘われた」読者と考えることも可能であろう。

『あなたは今この文章を読んでいる』（2014年）において佐々木敦は，読者の能動的関与を契機として立ち現れ「読者とともに駆動し，変異してゆくようなタイプのフィクション」を，「パラフィクション」と定義し論じている。*Generosity* における語り手はまさにこのパラフィクション的な読者の役割をも果たしている。テクストに干渉し，登場人物を駆動させるこの語り手は，積極的な関与を伴ってテクスト空間を変異させる読者でもあるのだ。

Generosity の結末部では，周りの世界が消えてゆき，語り手と Thassa のみが残される。そこで Thassa は語り手に対し，全ての「寛大な」答えを返す。ここで幸福感に包まれ，「私たちがこの後何になるのか」と変容を匂わせる語り手は，John Barth の "Night-Sea Journey"（1968）において愛を叫ぶ語り手，すなわち精子のようでもある。Thassa という「卵」に貫入する語り手の物語として本作を想定するならば，受精の結果として生まれるこの *Generosity* の中にまた *Generosity* を生み出す物語が内包されることになる。だとすれば，この作品の文章の区切りに用いられる無限大記号∞が暗示するメビウスの輪のような，繰り返されながら連綿と続く遺伝子の物語をここに読み込むこともできるだろう。そこで読者は，無時間的な無限の繰り返しの中に，「寛大に」受け入れられるのである。

以上の議論を踏まえ本発表では，作中で仄めかされる Kurt Vonnegut Jr.の *Cat's Cradle*（1963）に言及しつつ，幸福追求の物語を生み出す仮想世界とそこに取り込まれる人々，あるいはまたそこに必ずしも没入できない人々をも射程に入れ，フィクションと幸福の「信仰」が織り成す関係を探ってみたい。

第7室（ノートルダムホール本館2階 204ND）

司会 Taras Sak

1．"Exploding and Being Swallowed": Cannibalism in Toni Morrison's *Beloved*

大阪大学（院） Ng Lay Sion

The theme of cannibalism is central to the way in which the novel *Beloved* explores the history of slavery and its aftermath in the Americas. The discourse of cannibalism appeared in America from the time Columbus first arrived in America and it was closely related to the history and discourse of slavery. In Alan Rice's "Who's Eating Whom: The Discourse of Cannibalism in the Literature of the Black Atlantic from Equiano's *Travel* to Toni Morrison's *Beloved*," Beloved's dream of "exploding and being swallowed" has been critically linked to the oppressive and cruel practices of slavery, yet it is important to note the way in which the dream of "being swallowed" is largely unexplored. This presentation concentrates on the latter aspect, stating that in *Beloved*, cannibalism and slavery relate not only to the domination of black slaves by white masters, but also to the black mother-child relationships between Sethe and Beloved, Sethe and Denver, and the black sister-sister relationship between Denver and Beloved.

It is suggested that Sethe's cannibalistic tendencies are derived not only from the fear of white cannibalism but also from her maternal instinct to protect her children. After Sethe's husband had disappeared and the schoolteacher had stolen her milk, Sethe has no choice but to transform herself into a cannibal snake in order to protect her newborn child, Denver. The same psychological mechanism can be applied to Sethe's murdering of her unborn child, Beloved. However, Paul D sees Sethe's cannibalistic love as a type of selfishness, claiming that Sethe's love is "too thick." Paul D does not understand that only by becoming a cannibal mother can Sethe deconstruct the white cannibalism, thus leading to the reconstruction of her identity as a woman/mother/African-American.

Through analyzing the cannibalistic relationships between Sethe and Beloved, Denver and Beloved, Sethe and schoolteacher, Beloved and schoolteacher, we come to the point where we can see that cannibalism is formed by racism—the white belongs to textuality, literacy and civilization, while the black Other and Native American Other belong to orality, illiteracy and barbarity—which is derived from a white need to affirm white superiority. Throughout history, cannibalism has been a narrative device utilized by the whites to augment their dominance over their slaves. By implanting the image of barbarism and cannibalism into the black Other, the whites can thus designate themselves as the ones who represent civilization and humankind. Ironically, the system of slavery that is invented by the whites precisely deconstructs the images they have built of themselves, making them something no more than cannibals.

2．The Revenant's Voice Returns: The Transcendence of the Female Terrorist in Philip Roth's *American Pastoral*

大阪大学 Yuki Kondo

Philip Roth's 1997 novel, *American Pastoral*, approaches the life of Seymour "Swede" Levov's own *Paradise Lost*. The protagonist, Nathan Zuckerman, comes to discover only years later that the Swede's daughter Merry became a terrorist, bombing a town post office and killing a bystander in protest of the Vietnam War. Zuckerman's imagination explores in depth the aftermath of the event. In this presentation, I attempt to demonstrate that the Swede is the very representation of the part of America that ceased to change after being traumatized by the rebellious implosion caused by Merry, while Merry herself transforms into a revenant, conjured from the real, to borrow Lacan's term.

What should be first taken into account is Merry's speech impediment. In terms of having difficulties in speaking fluently, she belonged to the imaginary. What is more, her oedipal relationship with her father prevents her from advancing to the symbolic despite the fact that she is already a teenager. And that is when she bombs the post office and vanishes from the world. She, however, after being on the run for a long period of time, joins the Jain, an extremely stoic religious group promoting self-starvation. And thus her attempt to eradicate her own identity indicates her approaching toward the real, the realm where no language can access. She then no longer exists in the dichotomy of gender.

In contrast, as the Swede's life comes to an end, his life history is forever buried with him in the past. The fact that the Swede failed to confess to Zuckerman all that he suffered from indicates that his voice was lost while Merry gained back hers in the aftermath of the detonation. In this respect, he himself becomes the stutterer in the family. Furthermore, the Swede comes to his realization that his past still haunts him when he envisions Merry towards the end of the novel. She is not literally present, and yet she is there, and this applies to Derrida's argument on specters/revenant. The Swede is obsessed by the revenant Merry, who presents to him the American nightmare from the real which then shatters his American pastoral. And it is none other than Merry who transcends the realm of time and even geo-political boundaries, in that she brought the tragedy and destruction of the Vietnam War to the American mainland.

From these perspectives, I argue that Merry the terrorist was capable of approaching the real and at the same time becoming the revenant transcending time and space, leaving behind the people living in post-pastoral America.

司会　荘　中　孝　之

３．大西洋を越える言語的亡命——Jhumpa Lahiriの*The Namesake*における第三空間としてのイタリア

慶應義塾大学（院）　志　賀　俊　介

ベンガル人の両親の下にロンドンで生まれ，幼少期にアメリカのロードアイランドへ渡った経験を持つJhumpa Lahiri（1967–）は，一般的に「インド系アメリカ人」とカテゴライズされる。しかしながら，その呼び名はLahiriにとって二つの文化の間でどちらにも属することのできないジレンマを生んだ。そして，英語とベンガル語のどちらもが母語となりえない状況は，作家としての彼女に「言語的亡命者」としての感覚を持たせることになった。

ピュリッツァー賞受賞作 *Interpreter of Maladies*（1999）でのデビュー以降，*The Norton Anthology of American Literature*（2007）に短編“Sexy”が収録されるなど，アメリカ文学史上における作家としてのキャリアを順調に積み上げてきたかに見えるLahiriだが，2013年に長編 *The Lowland* を発表した後，アメリカを離れイタリアのローマへの移住を決意する。それ以来，Lahiriは英語での執筆をやめ，イタリア語で日記を書き始め，ついには短編をも書くに至った。イタリア語で書くことの試みに関するエッセイや短編の集積が，2015年に発表された *In altre parole* である。全編イタリア語で書かれたこの作品は，2016年に英語訳を伴い *In Other Words* として出版された。作家（author）としての権威（authority）を与えていた英語を捨て新たな言語を選択したことは，自身の拠り所となっていた「書く作業」に「亡命者」としてあえて揺さぶりをかける作業であった。そしてそれは，それまで「インド系アメリカ人」と呼ばれてきたことへの抵抗であるとも考えられる。

しかしながら，Lahiriのイタリアへの関心は突然生まれたものではなく，アメリカを離れる前にも，作品にその影響を見出すことができる。たとえば，短編“The Third and Final Continent”（1999）において，主人公がインドからイギリスへ渡る際に乗った船が「ローマ号」と名付けられていることは，この作家にとってのイタリアが海と結び付き，特定の文化に属することのないもうひとつの選択肢であることを示唆している。とりわけ，Lahiriにとって初の長編である *The Namesake*（2003）は，彼女へのイタリア文化の影響が散りばめられている作品である。それは彼女がアメリカで生活する中で間接的に触れてきたイタリア文化——たとえば料理，映画，音楽——が表象されているものと思われる。特に主人公のGogol Ganguliの名前のもととなった作家Nikolai Gogol自身が，生前ヨーロッパ各地を放浪し，中でもローマを愛したことは *The Namesake* のモチーフとしてイタリアがあることを暗示しており，Lahiriのイタリアへの関心，そして「言語的亡命者」としての意識へ繋がるものとして興味深い。実際に海を渡る前に，Lahiriにとってイタリアはすでに Homi K. Bhabha が言うところの「第三空間」として，アメリカとインドに次ぐもう一つの選択肢を与えていたと言ってよいだろう。

本発表では，アメリカにおけるイタリア系移民の歴史や，その文化の根付きを検証しながら，*The Namesake* を中心にLahiriの文学におけるイタリア表象を考察する。それにより，Lahiriがアメリカを離れイタリア語で書くに至った萌芽を再検討し，「アメリカ文学」という範疇そのものの問い直しについて論じたい。

４．「形なきもの」を手に入れる——Nina Revoyr の *The Age of Dreaming* における虚構とトラウマ

高知工業高等専門学校　沖　野　真理香

Nina Revoyrが描く主人公の多くは重層的マイノリティである。*The Necessary Hunger*（1997），*Southland*（2003），*Wingshooters*（2011）の主人公たちは，日系という人種，女性という社会的立場，同性愛という性的志向等を理由に，アメリカ社会がマイノリティと見做す要素を複数抱え込んでいる。しかしながら彼女たちは，一族の不遇の歴史に触れる機会を充分に与えられてこなかったり，それを理解するには未熟であったりと，自分たちを取り巻く差別に関して無頓着である。Revoyr作品では，これらの主人公たちが，アメリカ社会の人種差別被害者を代表するアフリカ系を主とした他のマイノリティを媒介として，自身の政治的主体性を見出す。そして，人種・性別・セクシュアリティを超えた人々のつながりを発見し，負の歴史を知り，理解し，受け止め，継ぐことの重要性を学ぶのである。本研究発表では，異性愛の日系男性を主人公に据えた *The Age of Dreaming*（2008）にも，このような作者の政治的主張を見出したい。

The Age of Dreaming の主人公Jun Nakayamaは，1907年に学生として日本からアメリカに渡り，その後サイレント映画全盛期に俳優として成功を収めた人物である。映画業界から退いて40年以上経ったある日，73歳の孤独な老人になったJunのもとに，彼を銀幕に復帰させようと意気込む若者から連絡が入る。これをきっかけとし，迷宮入りしていたある殺人事件の全貌が暴かれることとなる。Revoyrの前述３作品と比較すると，Junが背負っている被差別対象要素は人種に関するものだけである。また，他のRevoyr作品で欠かせない日系とアフリカ系との交流は *The Age of Dreaming* ではほとんど描かれていない。だが，不思議なことに，日系人への差別が最も激しかった時代を生きたはずのJunは，他の主人公たち同様，人種を理由とする周囲の偏見的態度に無関心なのである。本作品でも，主人公が政治的主体としての自己を発見し，トラウマの共有・継承を実践するに至る過程が物語の核となっていることは，作中の「虚構」に注目すれば抽出可能である。本作品には，映画，演劇，脚本，小説，新聞記事等，様々な形の虚構の断片が散りばめられている。Junはどのような虚構を与えられ，選び取ることで，自身のマイノリティ性を覆い隠してきたのか，そしてどのような虚構によって彼が目を背けていた真実が暴露されるのか。以上のように，本研究発表では「虚構」に注目して *The Age of Dreaming* を考察することで，“I liked acquiring tangible things”と述べる日系男性Junが，いかにして人種トラウマという“intangible things”を発見し，共有・継承していくのかについて論じたい。

第８室（ノートルダムホール本館２階　203ND）

司会　渡　邉　真理子

１．Samuel R. Delany の *Babel-17* における一人称複数の恋愛可能性

聖徳大学　平　沼　公　子

1966年に発表されたSamuel R. Delanyのネビュラ賞受賞作 *Babel-17* は，人類が銀河系を越えて文明を広げ，同盟軍と侵略軍に分かれて戦争を繰り広げる未来を舞台とした作品である。本作品のヒロインRydra Wongは，侵略軍が使用する人工言語Babel-17の解読に従事する同盟軍の暗号解読技師であり，詩人である。本作品におけるRydraの人工言語Babel-17解読作業，つまり敵軍から送られてくる通信言語の法則をマスターし，その内容と意図を理解する任務は，単なる翻訳作業ではない。対象言語の解読は，解読者自らがその言語法則を生きることと同義であり，人工言語Babel-17を解読することにより，Rydraは侵略軍の文法構造に自らを沿わせ，侵略行為を働くこととなる。*Babel-17* は，同盟軍対侵略軍という古典的スペース・オペラともいえるプロットでありながら，その対立構造の中心に言語と人間の関係の問題を据える複雑な作品なのである。

言語構造において，“I”とは一体どのような意味があるのか，また“I”という一人称が，“You”とどのような関係にあるのか，という謎は，本作品の最大の課題であり，また物語を解決へと導く糸口である。人工言語Babel-17は，その構造に“I”という主体をプログラムしないことによって，それを学ぶ者に対象を完璧に分析できるという感覚を与えるものとされている。このトリックにより，人工言語Babel-17をマスターしたRydraは，自らが破壊工作をする主体となることに物語半ばまで気付くことはない。物語の解決は，この“I”という主体の回復によってなされることとなる。この解決に最も深く関わるヒントとなるエピソードが，異なる言語体系と社会政治意識を持つ登場人物同士の恋愛，つまり“I”と“You”との恋愛関係であることは，本作品が言語の問題を人間社会の問題への一つの切り口として捉えていることを示すであろう。

本発表では，*Babel-17* における言語の法則の問題が，どのように登場人物同士の人間関係，特に恋愛関係に関わっているのかを分析することにより，人間が，その感情や行動において依拠する法則としての言語の側面を明らかにする。その上で，本作品における言語と主体の問題が，どのように人間とその社会構造の問題として提起されているのかを考察する。アフリカ系アメリカ人であり，SF作家であるDelanyが，1966年という年に発表した本作品において，この言語と主体の問題は，単なるSFのトリックとしてのみならず，言語と現実との間の相関関係を抉り，私たちの社会における位置関係の捉え方に再考を促すものとして考えられるのではないだろうか。本作品が示唆する恋愛の可能性とは，個人的かつ親密な経験が，一人称と二人称が重なり合う瞬間を探り合う，交渉と理解の場となる可能性なのである。

司会　金　澤　　智

2．Perpendicular Architecture: The Skyscrapers and Bridges of Henry Miller

北九州市立大学　Wayne E. Arnold

In Henry Miller's writing, two architectural structures are predominant: skyscrapers and bridges. References to these two perpendicular, manmade objects appear throughout Miller's novels and private letters. The most recognizable bridge is the Brooklyn Bridge, which physically connected Miller's childhood home to downtown Manhattan. Miller was an urbanite that detested the modern tendency for millions of people to cram together, fashioning out their meager wages while sacrificing their human potential. In Miller's works, I argue that this unexplored connection between the skyscraper and bridge are antithetical in their role within the urban world. The Brooklyn Bridge, as Miller scholar Katy Masuga argues, is a source of inspiration; whereas, skyscrapers represent the dehumanizing power of progress and urban development. Miller's Brooklyn Bridge has received select critical attention, most recently by Korean scholar Seunghan Paek, who argues that, for Miller, the Brooklyn Bridge is a passageway to perceiving the multiplicity of the city. Yet, expanding this view, we see that Miller employs both of these structures as signifiers of two divergent paths—the bridge, which "symbolizes the spreading of our will through space," according to Georg Simmel, and the skyscraper, which instead of reaching to the heavens, only obscures man's view, sequestering him.

As Yasuda Yojūrō (保田與重郎) observes in *Japanese Bridges* (日本の橋), the bridge allows for "a transient self-reflection." We see this in *Black Spring*, while on the apex of a Japanese-styled bridge, Miller "feel[s] the utmost security," as he can see the path of his destiny. Bridges represent the ability to transcend, and like the water below them, Miller gains the freedom of "flow", an ability to be released from the constrictions of limited voice, as suggested by Sarah Garland, allowing him to move towards more surreal interpretations of modernity through his literature. Skyscrapers, however, are referenced in an anti-thetical context, I believe, eradicating freedom, as they stand for the machinations of a system of enslavement. From his childhood to the time he moved to Paris, Miller witnessed the opening of the Manhattan Bridge and watched the ever-increasing heights of the New York City skyline. Examining Miller's published work as well as incorporating unpublished archive material, I demonstrate that throughout Miller's writing, he develops an urban philosophy in which the skyscraper acts as impediment, but the bridge is a threshold to new possibilities.

司会　新　田　啓　子

3．『アンクル・トムの小屋』ではなく，アンクル・ロビンの城——*Flight to Canada* における Raven Quickskill の言葉の魔術

日本女子大学（非常勤）　峯　　真依子

アフリカン・アメリカン文学でネオ・スレイヴ・ナラティブに位置づけられる *Flight to Canada* の主人公 Raven Quickskill は，読み書き能力によって自由を手にする。ヴァージニア州のアーサー・スウィルの大邸宅で識字能力を身につけた Quickskill は，プランテーションの帳簿係としてめちゃめちゃな奴隷購入の帳簿記録をつけ，奴隷の移動許可証と解放書類を偽造し，あげくの果てには逃亡宣言をテーマとした詩作によって，いわゆるセレブとなる。だが，「本日午前，ジャンボに乗ってひとっ飛び　シャンパンをあおる　当機には逃亡奴隷がご搭乗です，と機長からの祝辞　乗客らが握手を求めてきた　で，ものの10分　３つの反奴隷制集会と契約した　事務所を探さなきゃならないぜ」という詩 "Flight to Canada" は，じつは逃亡後に書かれたのではなく，逃亡前に書かれたものであった。詩に書いたことが，そのまま現実化し，いわば詩（言葉）が彼を「カナダ」へ逃亡させるという現実をもたらす。

本発表の目的は，このように言葉が現実と化す，また Quickskill が「魔術」と呼ぶ，言葉に込められた呪術的な力の本質を見極めることと，次にその力の行使によって，Quickskill が何に闘いを挑んでいるのかを明らかにすることにある。たとえばそれらの手がかりとなるのが，Quickskill をはじめとする型破りな奴隷たちの登場によって言語の意味内容に混乱がもたらされ，次第に奴隷という言葉の内実が失われていくエピソードの数々である。自分そっくりな替え玉に農作業をさせ，自分は養鶏場の経営で成功する奴隷リーチフィールドの例のみならず，奴隷アンクル・ロビンが，スウィルの大邸宅（城）を相続してアメリカ合衆国きっての財力を手に入れるにいたっては，もはや奴隷という言葉は完全に意味をなさなくなってしまう。またエンディングにおいて Quickskill は，『アンクル・トムの小屋』ならぬ，アンクル・ロビンの城についての物語を書こうとするのであり，そのとき彼のテクストは作品の登場人物の一人でもあるハリエット・ビーチャー・ストウの書いたひとつのマスター・テクストに対するカウンターを提示してもいる（もしくは，Quickskill が，ストウを鮮やかにもの騙っている）。

本発表にあたって，まず *Flight to Canada* は，ロバート・B・ステプトのいうテクストをコントロールできる者こそが自由を獲得できるというアフリカン・アメリカン文学における識字とリテラシーの伝統に位置づけられることを確認したい。その上で，言語的な分析をアフリカン・アメリカン文学の伝統に結びつけながら，ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアの『シグニファイング・モンキー』で展開される意味論を中心とした批評理論に依拠して，Quickskill の言葉の「魔術」についての考察を進めたい。

4．潰えた夢への惜別，夢見る力への賛辞——*July, July* における対抗文化世代の未来への希望

九州工業大学（非常勤）　田　吹　香　子

西暦2000年とは第二千年紀の終わりと20世紀の終わりという二つの区切りを示す年だった。この年においては，洋の東西を問わず広い意味での歴史を振り返る者も多かっただろうし，激動の時代と言われた20世紀に自らがたどった道を思い出し，いつくしむ人も少なくなかったはずだ。

Tim O'Brien が2002年に発表した *July, July* では，ミレニアムと呼ばれるまさにその2000年に過去を振り返り，語る人々が描かれる。彼ら・彼女らは Darton Hall College の1969年の卒業生であり，結婚や離婚，病気や身近な者の死を経験し，もう若くはないと感じ始めた50代前半の対抗文化世代だ。登場人物たちは2000年７月に卒業校の体育館に集まり，二日間の同窓会において酒を飲み，踊り，大学時代の思い出や卒業後の過去を語り，また，それに耳を傾ける。ある男女はそれぞれベトナム戦争への徴兵や従軍経験を巡る記憶を語り，ある者は反戦運動をきっかけに得た人生の転機とその顛末を語る。また，幼少期から死の影にとりつかれ続けた人生を語る者もいれば，破たんした結婚生活の様子を話して聞かせる者もいる。物語るこれらの10人の男女の過去はそれぞれ別個の章にまとめられ，一人の物語が終わるごとに同窓会の様子を描く章が現れることで，作品の中で過去と現在が交錯する仕組みとなっている。

しかしながら，このように対抗文化世代の人生やベトナム戦争の兵士の苦悩など O'Brien の作品にはおなじみの題材を扱うにも関わらず，*July, July* は不評を買った。Alan Davis は対抗文化世代の「上っ面」だけを書いている感が否めないとし，Patrik A. Smith は O'Brien が女性という「他者」を描いたことが作品の失敗につながったと述べる。さらに，Johnathan Yardley は老いを感じ始めた中年期の男女が過去を振り返る「メロドラマ的」作品に過ぎないとまで評する。

確かに，本作品には登場人物が多く，彼ら・彼女らの過去は対抗文化世代の集合的記憶や結婚や離婚，情事といったゴシップ的なトピックを切り貼りしてできた，よくあるという物語だという印象を読者に与えることは否めない。だが，作中において既に死している Karen Burns と Harmon Osterberg の物語の描かれ方とその二人の死を悼む記念式に着目し解釈すると，本作品が中年期にある人々の単なるメロドラマではなく，感傷的ではあるが一つの共通する目的を持って語られる物語群であることが分かる。それは対抗文化世代の貪欲な「夢」がもたらした影を語ることとその古い「夢」の残骸の追悼，そして新たな「夢」を見ることへの賛辞なのだ。

本発表では，この対抗文化世代の「夢」に着目し，Karen の物語が「夢」の弊害を，Ellie Abbot の物語に吸収された Harmon の姿をその残骸の象徴と捉え，死者の追悼式が彼らの「夢」の喪失を悼む行為であるだけでなく，「夢」の力を再び肯定し再出発するための儀式でもあることを論じる。

第９室（ノートルダムホール本館２階　202ND）

司会　大　西　直　樹

１．生まれることのない言葉を抱えて——Sylvia Plath における“embodiment”の困難

神戸市外国語大学（院）　井　上　詩歩子

Sylvia Plath（1932-63）が多くの詩を通して表現し続けたのは，言葉に出来ないものの存在，あるいは詩作という行為そのものが持つ破壊性であったように思われる。詩人が心に抱くある種の感情や事象は，明確な表現を与えられないどころか，言葉によって無理に言い表そうとすると，損なわれ，抹消される。詩人，とりわけ自己の内面を詩作の中心に据える Plath のような詩人にとって，これは目を背けることの出来ない問題であった。

Plath が生涯を通して詩を書くことの困難を意識し続けていたことは，自殺する十日前に書かれた“Words”という詩が物語っている。この詩において，言葉は，詩になったと同時に「乾いた，乗り手のいない馬」となって詩人のもとから走り去り，「斧」の比喩が，言葉の破壊性や扱いがたさを示す。しかし，この詩には，そうした無益な言葉に対立するものとして，斧で切りつけられた木から流出する「樹液」の存在が提示されている。いかなる表現をもすり抜け，語り手の目の前で流れ落ちていくその「樹液」は，例えば Axelrod も指摘するように，詩の言葉の源泉，すなわち詩人の内なる魂の表象と言えよう。詩人は，この〈内なる言葉〉とでも呼ぶべきものを言語化することの不可能性をうたいながら，同時に言葉にならないものの存在を強調しているとも言える。

このように詩作の過程で失われてしまうものの存在を逆説的に示してみせる手法は，妊娠・出産について書かれた Plath の詩において，一層顕著である。これらの詩において，胎児は詩の比喩として繰り返し登場するが，興味深いことに，正常に生まれてくることは滅多にない。多くの場合，母親の胎内に留まるか，堕胎されたり，生まれた瞬間に命を落としたりと，“body”を与えられることがない。詩人はわざと創造的行為の失敗を描き，ある種の物事を詩の言葉で表現する（embody）ことの難しさを強調しているのではないか。

このように，Plath の詩には，言葉にしがたいものを何とか表現しようとする詩人の苦闘と挫折が読み取れる。詩作の破壊的側面を十分に承知する詩人は，ある種の感情を的確に表すことは不可能であると考え，それらを明確な輪郭を持った言葉にすることを自ら放棄してみせる。しかしそのような場合，〈内なる言葉〉の存在は，生まれない胎児の描写を通して，かえって鮮烈に読者に印象づけられるのである。本発表では，“Stillborn”や“Thalidomide”をはじめとする Plath の詩に繰り返し描かれる生まれない胎児の描写に注目し，その意義を考察したい。

２．Emily Dickinson と日本の花：William Clark と新島襄

神戸女学院大学（名）　鵜　野　ひろ子

これまで私は19世紀の America の詩人 Emily Dickinson が隠遁者で世事に疎く，人知れず詩を書いていたというイメージを払拭するため，彼女がいかに知的好奇心に満ちていて，30歳以降に隠遁生活に入っても，当時最新の知識を吸収し，それを詩に生かしてきたかを様々な角度から証明してきた。

最近は，彼女が生前，園芸に長けていることが周りの人に知られていたことから，彼女の園芸や植物学の知識に興味を抱き，彼女の作成した植物標本の中に日本原産の植物が数点あることに注目し，どのようにして彼女がそれらを手に入れたかを調査している。まず，彼女の標本中の植物と，1853年から1854年の Perry の日本遠征隊が収集した植物標本とに共通の植物があることがわかった。彼女の父親が当時 Whig 党の国会議員で，日本遠征を推進していた Daniel Webster を応援していたこと，日本から米国大統領等への贈り物や，遠征隊の収集した植物などが Washington に到着した直後の1855年２月半ばに，彼女が父親を訪ねて当地を訪れ２～３週間滞在したこと，そしてその年の内に，遠征隊の持ち帰った生きた植物のために国会議事堂の敷地内に温室が造営されたように，彼女の自宅にも温室が増築されたこと，さらには実際に日本で植物採集をした一人，Samuel Wells Williams が American Board から派遣されて Macao に住んでいた宣教師だったことなどから，遠征隊が持ち帰った植物の一部が彼女に分け与えられたのではないかと推測した。さらには，Dickinson 家が American Board と関係があり，高額な会費を払って，詩人自身も含め家族と親類全員が名誉会員になっていたことなどを突き止めた。また Harvard 大学にある遠征隊の標本を直に調査して，共通の15点の内の多数は日本遠征隊経由でなければ，19世紀半ばに彼女が手に入れられるはずがないことも証明し，日本遠征隊が採取した植物の一部を彼女が手に入れたという可能性が限りなく高いことを証明した。

今回は，彼女の植物標本にある日本原産の植物の他の入手経路について検討する。まず1860年代の New England 地方における日本ブームの中で，日本原産の植物が多数輸入され展示，販売されていたことを当時の新聞広告などから証明する。また彼女の家の裏には William Clark がしばらく住んでいたが，彼は若い頃から植物採集および標本作成に熱心で，Amherst 大学で教鞭をとっていた時も，週末には一般の人々に植物採集の指導をしていたこと，70年代に入ると，日本に滞在し，多数の植物の標本や種を持ち帰ったこと，さらには彼と新島襄が親しく，新島襄から日本の植物の種を手に入れていたこと等から，Dickinson の手にも渡った可能性について検討する。

司会　長　畑　明　利

３．石鹸，結婚指輪，金の入れ歯——Sylvia Plath の芸術（アート）が斜交いに影響を受けた要素

呉工業高等専門学校　上　杉　裕　子

Sylvia Plath は自らの詩について，次のように語っている。

「これ［時代の問題］は私の書く詩に影響を与えるでしょうか？はい，与えます，とは言っても*斜交いに*です。（中略）　私の詩はヒロシマについての詩になるのではなく，暗闇の中で指一本ずつから作られる子どもについての詩になるのです。大量消滅の恐怖ではなく，近所の墓地に立っているイチイの木の上に懸かる月の肌寒さを扱ったものになるのです。迫害されるアルジェリア人の証言ではなく，疲れたひとりの外科医の夜の思いを扱ったものになるのです。」（“Context” *JP*　98　強調筆者）

Plath が“Context”で強調したことは，まず，自分は時代の問題に強い関心を抱いているが，自分の詩は例えばヒロシマをストレートに扱ったものにはならないということであった。この彼女の言葉には彼女の芸術の鍵を握る重要な意味が込められていると私は注目している。それゆえ，私は，Plath の作品にアウシュビッツやヒロシマを見出したからといってそれが即彼女の時代意識が表出されたものである，または詩にインパクトを与えるための用語選択であったと解釈するのはあまりにも唐突，単純過ぎて危険ではないだろうかと疑問視する。Plath としては，むしろ逆に「暗闇の中で指一本ずつから作られる子ども」の中にヒロシマを，「イチイの木の上に懸かる月」の中にホロコーストを，「疲れたひとりの外科医」の中に迫害されるアルジェリア人の姿を読み取って欲しいのではなかったのだろうか。

Plath はさらに続けて「ある意味で，私のこれらの詩篇は屈折（deflection）なのです。それらが逃避だとは思いません。私にとって私たちの時代のリアルな問題はすべての時代の問題なのです」（*JP* 98）と言っている。これを，彼女がＢＢＣ放送の対談で行った「個人的経験は，閉ざされた箱のような，鏡に見入るナルシシスティックな経験であってはならないと思います。」「個人的経験は，ヒロシマやダハウ等々といったものにも，広く当てはまるものであるべきだと信じています。」（徳永 170）という発言とあわせて考えると，詩に使われた社会や時代的要素を含む言葉と彼女自身の内面を映し出す言葉との関係についての Plath 自身の芸術観が浮き彫りになる。詩は「宗教的または政治的プロパガンダ」であってはならないのは言うまでもないことだが，逆に時代の問題とはまったく無縁の個人的問題にだけ関わるものであってもならないと彼女は考えているのである。これら Plath 自身の詩論を出発点とし，彼女の芸術に「斜交いに」影響を与えた要素とは何なのか，具体的に詩を再読しながら，その要素のひとつひとつを紐解いていくことによって，Plath の芸術（アート）創造の原点に迫っていきたい。

４．“Daddy, Daddy, you bastard”——Sylvia Plath の lyric “you”

首都大学東京（名）　渡　部　桃　子

Lyric と呼ばれる詩（いわゆる抒情詩）には，“you”という言葉が用いられることが多いが，この“you”のほとんどは——vocative「呼格」——「よびかけ」として用いられており，この「よびかけ」があってこそ，抒情詩というものが成立するとも言われる。

ただし，この lyric “you”が，一体誰（あるいは何）なのかについては，批評家の間でも意見が分かれる。時には擬人化された抽象的な概念であることからも明らかなように，（たとえ詩人の「伝記」から推測できるように思えたとしても）実在しない，詩人がつくりあげた想像上の人物にすぎないという主張がある一方，「伝統的な」抒情詩の“you”は，もともとは実在する人物であったとの主張もある（無論，文学批評においては，すべてをテクスト内の現象と捉えるべきとする

ならば，当然ながら“you”は「不在」である)。さらに，この“you”と詩の「読み手」，読者との関係で考えると，この“you”を詩人たちがそれぞれどのように用いていたかを検証することで，彼らの差異が明らかとなってくる。

たとえば，Jonathan Culler などが定義する apostrophe（頓呼法）では，語り手が“you”と呼びかけるのは，想像上の人物（あるいは人間ではないもの，抽象的な概念など）であり，語り手は，読者に背を向けており，読者はその詩を「立ち聞き」する，あるいは「偶然に聞く」ということになっている。それによって，詩人は〝unacknowledged legislators of the world″としての地位を確立できるとのことである。一方，Helen Vendler などのように，読者が「立ち聞き」していることにはかわりがないが，完全に無視されているのではなく，詩人は読者を詩に招きいれるためにこそ，“you”を用いているとする者もいる。つまり，読者に“I”と“you”の関係を示すことで，“I”がどのような人物かはっきりさせ，読者を“I”と同一化しやすくさせるというのが詩人の作戦だということだ。あるいは，lyric に関する古典的な著作，*The Idea of Lyric*（1982）の著者，W.R.Johnson によれば，lyric の目的は，個人的な感慨・思索を他者と分かち合うことで公のものにすることにあり，したがって lyric の“you”は，そもそも詩人が自らの思いを伝え，そのことになんらかのかたちで反応してもらいたいと願っている実在する／した人物（一定のアイデンティティを有する社会的存在）に想定されているはずなのである。その場合，“you”と読者の距離は限りなく近い。

とすれば，Robert Lowell の *Life Studies*（1959）を嚆矢として，1960年代からのアメリカの詩の世界を席巻した「告白派」詩人たちの詩の“you”は当然ながら，この３番目の“you”にあたると見なせるだろう。実際 Lowell や Anne Sexton の詩に多用される“you”は，実在する/した人物であることが読者にもはっきりとわかるようになっている。しかし同じく「告白派」詩人と呼ばれる Sylvia Plath の詩の“you”はちがう。実在する/した人物のような「仮面」をつけているが，実は時空を超越した人物，Plath 自身が設定した「劇場」において一定の役割を演じるために構築された人物なのである。

本発表では，Sylvia Plath の詩の“you”がどのように構築されてきたのか，その構築過程をたどり，またこの“you”が，いかに Plath の詩をユニークなものにしているかを探っていきたい。

第10室（ノートルダムホール本館２階　201ND）

司会　相　原　直　美

1．*Cat on a Hot Tin Roof* における妊娠，死，セクシュアリティ

大阪大学（院）　村　上　陽　香

男性同性愛者であった Tennessee Williams の劇作品に，女性の経験と捉えられがちな妊娠や出産に関する描写が繰り返し登場しているのは意外かもしれない。Williams が描いた妊娠に関する描写に共通するのは，*The Rose Tattoo* の Serafina の懐妊を除いたほとんどの場合，それが祝福されなかったり，不毛な結果に終わったりするということだ。また，Williams の作品には死の影が色濃く映されていることが珍しくない。*Cat on a Hot Tin Roof* では，Big Daddy が死に瀕している状況があるからこそ Maggie は偽の懐妊宣言をしており，消えゆく命と待ちわびられる命のコントラストが示されている。誕生と死が結び付いたものとして作中に混在していると考えることが可能であろう。本発表では，*Cat on a Hot Tin Roof* における欺瞞的な妊娠・出産の描写に着目して，繰り返し批評の対象になってきた彼の描く死について新たなアプローチを試みたい。

また，Williams 作品における妊娠と出産を考察する上で，忘れてはならないのが異性愛と同性愛の関係である。彼の書く出生に関する描写が不毛なものであるということが，単に異性愛社会に対する反感だと捉えてしまうのはあまりに惜しい。確かに，*Cat* のGooper と Mae 夫妻の子沢山は彼らの強欲さと結び付き，異性愛関係を愛の無いものとして映し出す効果を持つ。Maggie による偽の懐妊宣言や，拒絶する夫 Brick と半ば強制的に夫婦関係を持とうとする姿も，本作のテーマの一つである「欺瞞」的なものであることは否定できない。神格化される Brick と Skipper の同性愛的ともいえる友情を前に，異性愛関係がネガティヴな印象を付けられているのは間違いない。

しかし，視点を変えてみれば，Maggie の懐妊こそが，*Cat* の舞台となる巨大プランテーションに残る同性愛関係の寛容さを維持するために必要なものだと捉えることも出来る。本作の“Notes for the Designer”にて Williams は，プランテーションの創始者であるゲイカップル Peter Ochello と Jack Straw の亡霊が，類まれなる優しさで舞台を包んでいることを記している。もしプランテーションが強欲な Gooper らの手に渡れば，この亡霊カップルは存在を忘れ去られ，舞台に存在する優しさも消え去ってしまうだろう。それを阻止するためには，Big Daddy に認められ，愛された Brick がプランテーションを継承するほかないのだ。アルコール中毒に陥っている Brick が継承権を得るためには，Maggie の懐妊，つまり Brick が父親としての責任感をもち，夫婦の後継者となる子どもが生まれることが不可欠である。同性愛者によって作り上げられたプランテーションを愛なきヘテロセクシュアルから守るために異性愛関係が強制される，という逆説的な状況が *Cat* では発生しているのだ。

Williams の作品では誕生と死や，異性愛と同性愛という，一見すると二項対立的な事柄が複雑に絡み合いながら共存している。本発表では *Cat on a Hot Tin Roof* で描かれている妊娠・出産を，作品のテーマでもある同性愛や死と絡めながら考察することで，これらの相反する事柄の連動性に迫ることが出来ればと考えている。

2．Tennessee Williams とエロティシズムの劇場――*Clothes for a Summer Hotel* における「欲望」の表象

大阪大学（院）　朴　　建　雄

Tennessee Williams の1960年代以後の後期作品は，彼の生前，批評家たちに酷評されていた。しかし近年，後期作品を再評価する動きが活発化している。特に「亡霊」を題材とした *Vieux Carré*（1978），*Clothes for a Summer Hotel*（1980），*Something Cloudy, Something Clear*（1981）の三作は，Williams が晩年達した新境地として多くの研究者に高く評価されている。これら「亡霊劇」に関しては，これまでその時間の表象の特殊さが注目されてきた。歴史的時間に代わる，過去と現在が連続する時間世界が描かれているという George W. Crandell の評価はその代表的な論考である。

しかしこうした研究では，「亡霊劇」が Williams の劇作で繰り返されてきたあるテーマを突き詰めたものであることが見逃されている。それは，死者への欲望である。この死者への欲望は Williams の主要な作品の多くにみられる。亡霊のように主人公の記憶に憑いた死者は，性的欲望の対象であるが，対象の死ゆえにその欲望は達成されえない。*A Streetcar Named Desire*（1947）の Blanche や *TheRose Tattoo*（1951）の Serafina はこの欲望に身を焦がす存在である。こうした Williams 前期の作品では，死者への欲望が現実世界に代替物を求めた。しかし「亡霊劇」においては，欲望の主体は現実世界ではなく追憶の中で亡霊と同じ世界に存在し，より欲望の対象に近づいている。さらに注目すべきは，「亡霊劇」の主人公はみな Williams の自己投影が明らかな作家だという事実である。Williams 後期作品において，性的欲望は執筆への欲望と重なり合う。これら二つの欲望は同じ根を持っている。それは，「野性」「炎」として表象される過剰な情念であり，Georges Bataille が論じたエロティシズムに関わるものである。

Bataille の理論によれば，エロティシズムとは禁忌の侵犯において生じる経験である。性や死という形で表出する自然の過剰な暴力を禁忌により抑制することで，人間は動物とは異なる存在となった。その抑制された暴力を制御された方法で一時的に開放することが侵犯であり，そこに生まれる経験がエロティシズムである。「亡霊劇」において「野性」と「炎」として表象される作家の性的芸術的欲望は，Bataille の理論における過剰な暴力に相当する。主人公たちは自らの「野性」「炎」の犠牲になった死者を欲望の対象として追憶の中に呼び出し，エロティシズムの瞬間を再演するが，対象の死ゆえに彼らは決して欲望を充足できず，その欲望はただ繰り返されるのみである。さらに，「亡霊劇」を極私的な追憶から作り出した劇作家 Williams 自身の営為にも，この欲望の反復は見いだせる。こうした欲望の永遠の空転を描く Williams の「亡霊劇」は，「エロティシズムの劇場」と名付けることができるだろう。

本発表では，Williams 生前最後のブロードウェイ上演作となった「亡霊劇」*Clothes for a Summer Hotel* を分析する。Williams 自ら“A Ghost Play”と銘打ったこの作品では，登場人物はみな亡霊である。主人公は実在の作家 Scott と Zelda の Fitzgerald 夫妻だが，この二人には Williams 自身が投影されている。作中の大部分を占める Zelda の追憶の中で描かれるのは，自らの「野性」に身を任せて性的芸術的欲望を満たせる対象を探し求めた Zelda を，Scott が執筆への欲望の「炎」で焼き尽くし狂気に陥らせるにいたった顛末である。この「エロティシズムの劇場」における Fitzgerald 夫妻の錯綜した性と執筆への欲望の分析を通じて，その奥にある作家 Williams の「欲望」を明らかにしたい。

司会　伊　藤　　章

3．August Wilson の *Seven Guitars* が示す親の愛と人種的抵抗の変容

大阪大学（院）　中　山　大　輝

August Wilson は，20世紀アフリカ系アメリカ人民衆史を10年ごとに１作，全10作で描く Pittsburgh Cycleを完成させた。本サイクル劇の先行研究において重要課題の一つとされてきたのが，黒人が拠り所とする人種的歴史・伝統の継承問題である。事実，サイクル劇第２作 *Ma Rainey's Black Bottom* の「まえがき」で，Wilson はブルースが表象する歴史・伝統の重要性を記している。しかし，サイクル劇第７作 *Seven Guitars*では，この人種的歴史・文化の継承が登場人物を同族殺人へと追い込む状況が描かれる。この意味で，*Seven Guitars* はサイクルにおける継承のテーマに新たな問題を提起する。本作で過去との繋がりに執着する Hedley はかつて父親の夢を見る。夢のなか，Hedley の父は Buddy Bolden を介してもたらす現金でプランテーションを買うようにと息子に告げる。プランテーションが黒人にとり奴隷時代の表象的場，白人による歴史的圧制の象徴であるのは言うまでもない。父が告げたプランテーションの獲得と所有は，Hedley にとって黒人の白人支配からの解放を意味するようになる。

Hedley の父親は自ら崇拝していたコルネット奏者 Buddy Bolden にちなんで息子を Hedley と名付けた。そして父親の意志を受け継ぐ Hedley もまた自らの息子が偉大な人種的解放者になることを夢見る。こうして父親の存在は息子に人種意識と拠り所をもたらし，白人への抵抗と人種的独立を目指す黒人の歴史継承精神のエージェントとして作用する。しかし，父から子へ継承されるプランテーション獲得による人種的独立の夢は，Hedley に生きる拠り所をもたらす一方，彼を束縛する足枷ともなる。

以上を踏まえ，本発表で着目するのは Hedley が犯した２件の殺人である。一つは，彼の名前を否定した黒人の殺害。もう一つは，銀行強盗によって大金を手にした Floyd の殺害である。Floyd が強奪した現金が本来父親から自分にもたらされたものだと Hedley が考えた故の殺人である。言い換えれば，Hedley にとって父の遺産であり，白人の圧制からの解放手段となる大金が，Hedley を同胞殺人へと駆り立てたのである。父親から受け継いだ人種的抵抗の精神が，同じ黒人に対する暴力へと変容する。この黒人間の同族殺人は何を意味するのか。本発表では，Hedley の親子関係がもたらす黒人間暴力を中心に，*Seven Guitars* に見られる人種的歴史・遺産の継承と人種的抵抗が孕む問題系を考える。

4．アメリカ演劇において「他者」を形成する要素の分析

中央大学　黒　田　絵美子

20世紀アメリカ演劇の代表作および21世紀に発表された戯曲を取り上げ，作品の中で主人公と「他者」とを分ける要素に着目，分析する。人種や性差，経済的・知的階級，人生哲学の違いなど，「他者」を意識させる要素はさまざまであるが，各作品において登場人物たちが身を置く「場」に注目して，そこに生ずる葛藤やパワーゲームを分析し，そこから見えてくるアメリカの姿を提示する。

自分の帰属すべき場を求めて New York のさまざまな場所を訪れた *Hairy Ape*（Eugene O'Neill 作 1922）の Yank は，先に挙げた他者意識を生じさせる要素のほぼすべてにおいて他より劣る，いわば「負け組」であることを次第に自覚させられて愕然とする。そして，自分が身を置ける場がどこにもないという絶望的な認識に至る。

一方，Tennessee Williams の *A Streetcar Named Desire*（1947）の主人公 Blanche は，生まれ育った裕福な荘園を追われ，自分には「場」違いな New Orleans の下町の妹の家に身を寄せる。しかし，美貌と教養を備えた上流の女性としてのプライドから，自分にとってはアウェイな「場」の主である Stanley を下等な人間と見下して，Polack と呼び，緊張関係を作ってしまう。同じ南部を舞台にした *Driving Miss Daisy*（Alfred Uhry 作 1987）では，Blanche を彷彿とさせるプライドを持つ主人公 Miss Daisy に「老い」というハンディが背負わされ，そのために自らが長年かけて築いてきた家という「場」に黒人運転手 Hoke を受け入れざるを得なくなる。しかし，人種差別と公民権運動が激化する1960年代にさしかかると，それまで経済力と知性に恵まれた白人女性という優位なカテゴリーに帰属していた Miss Daisy が，ユダヤ人であることから差別の対象となり，WASP の人たちからすれば Hoke と同じ部類に入れられる。Miss Daisy は，自分が「他者」とみなしていた人物が実は「同類」であり，自分が世間からは「他者」として排除される存在であったことに気づくのである。

2011年に初演された David-Lindsay Abaire の *Good People* では，主人公の白人女性 Margie が帰属する「場」は，Boston の貧しい港町である。シングルマザーとして障害のある娘を育て，その日暮しの生活をする中，かつてのボーイフレンド Mike が医師として成功し，その妻が黒人であることを知る。招かれてもいないのに高級住宅地にある Mike の家を訪れ，医師の夫と大学教授の妻という理想的な上流階級（Good People）の生活を目の当たりにした Margie は，「場」違いなところに来てしまった屈辱を覚えるとともに，かつては自分と同じ貧しい町に帰属していた Mike に激しい嫉妬と復讐心を抱く。自らの努力の結果，社会的上昇を果たした Mike からすれば謂れのない理不尽な嫉妬である。同様に社会的成功を収めた友人に対する嫉妬を描いた戯曲の代表例として，*Death of a Salesman*（Arthur Miller 作 1949）の Charley に対する Willy の嫉妬が挙げられる。Willy は唯一の友人であり，毎週金を貸してくれる恩人でもある Charley に対し，見下すような態度を取り，嫉妬心を露わにする。Charley にしてみれば，仕事まで世話をしてやろうと言うのに頑なに拒み続ける Willy の心理が理解できない。

このような視点からアメリカ演劇の代表作の主人公が身を置く「場」に注目し，そこを舞台として生ずる自己と他者という緊張関係を形成する要素を丹念に拾い上げ，結論として，そこから見えてくるアメリカの姿を分析・提示する。

総　会（午前10時15分～10時45分）（カリタスホール２階・カリタス200）

特別講演（午前10時45分～11時45分）（カリタスホール２階・カリタス200）

司　会　広瀬　佳司（ノートルダム清心女子大学）

“Art Spiegelman's *Maus*: The Holocaust as Comic Book”

講　師　Dr. Andrew Gordon（Professor Emeritus of English, University of Florida）

ワークショップ（午前11時55分～午後１時15分）

ワークショップⅠ（アメリカ文学・授業方法研究会）（ヨゼフホール２階　2200JB）

英語の教室におけるアメリカ音楽――歌詞の研究と授業での活用法

司会・発表者　関　戸　冬　彦（獨協大学）
発表者　小　林　愛　明（静岡英和学院大学）
発表者　山　中　章　子（日本工業大学）
発表者　吉　田　　要（首都大学東京）

英語の教室では「アメリカ文学」を堂々と教材として扱うのは難しい，というのが昨今の状況である。また，たとえ扱えたとしても学習者たちの語学力を向上させ，同時に文学的な内容理解をも深めていく，というのはなかなか容易なことではない。では小説や詩ではなく，曲の歌詞ではどうだろうか。長年中学校教員として歌を用いた授業を展開してきた中嶋洋一は，英語の歌を歌うことで英語を身近に感じる，という。本ワークショップではそんな先例に倣って，大学の英語の教室における歌詞，特にアメリカのミュージシャンたちの楽曲を用いる可能性を探り，どういう点に配慮すれば語学力の向上とより深い内容理解を同時に達成できるのか，についての議論と実践例を示してみたい。なお，昨年12月に東京支部で行われたシンポジウム，「ロック詩人　歌詞を詩として読むこころみ」，のように歌詞を完全に詩として扱うのではなく，曲の音楽性それ自体も学習者への動機づけという観点から考慮に入れることとする。

以下，４つの具体的授業案を発表者側から提示したい。授業案によっては，フロアの先生方と一緒に活動を体験していただく時間も設ける予定でいる。

授業案１

Bruce Springsteen は“Born in the U.S.A.”で知られるように，アメリカを題材に歌を作り，自ら歌いかけるシンガーソングライターである。Springsteen は2000年代に入ってから，特に9.11のテロの後から，政治的とまでは言わないものの，メッセージ性を前面に押し出した曲をいくつも発表している。今回は，その中から2007年に発表された *Magic* というアルバムに収録されている楽曲を用いた授業案を提案したい。この授業案では，英語力向上と内容理解とを同時に満たすことを目標とし，グループワークも取り入れて展開していく。

授業案２

授業で洋楽を扱う際に，学生の大半が往年のヒット曲を知らない，という現象はよく起こる。学生が知らなくとも，教員側が知っておいて欲しいと思う曲を使うことに大きな意義があることは確かだが，できるだけ多くの学生が知っている曲を用いた方が，その曲と英語の歌詞の中に学生を呼び込みやすいということもまた事実だ。このような前提に立つと，ディズニー映画の曲を使うことには，共通認識の底辺が広いという大きな利点がある。この授業案では，映画や物語を参照する可能性も考えながら，ディズニーの曲を用いた授業展開を提示したい。

授業案３

語学科目の授業として洋楽を使うとき，たとえ名曲であってもあまりに難解な曲を使うことはクラス運営の面でリスクが高い。そこで，認知度が高くポップロックとして定評のある Maroon ５の曲を利用した授業を提案したい。明確な発音と美しいメロディを誇る Maroon ５の英語は，破格が少なく教材として扱いやすい。またラブストーリーの一部を切り取った歌詞は，時制や人称の変化を意識し，言外の物語を想像しながら読み進めるのに適している。この授業案では歌詞で読解の訓練を行い，更に学生自身が物語を創作するライティングへの展開も模索したい。

授業案４

有名な洋楽の曲を語学の授業で用いることはとても意義がある。まず，英語の文法や発音をメロディやリズムとともに楽しく学べる。また，歌詞と似た主題の小説や映画と関連付けながら教えるのも良いだろう。でもせっかく曲を扱うのだから，学生と一緒に歌った方がいい。そうすれば，意味を超えて感じる「音」の力が意識化されるはずだ。そこで今回は Bob Dylan の“Blowin' in the Wind”を使った実践例を紹介する。その際は，ＲＣサクセションによるカバー作品を用いて翻訳の本質にも触れてみたい。また，オリジナルの歌詞を作成し，曲に乗せることによって，言葉と音楽の面白さを教えることの有用性に関して検証したい。

ワークショップⅡ（アイリッシュ・アメリカン研究会）（ヨゼフホール３階　2300JB）

アイリッシュ・アメリカンの世界

司会・発表者　西垣内　磨留美（長野県看護大学）
発表者　長　岡　真　吾（島根大学）
発表者　馬　場　　聡（日本女子大学）
コメンテーター　松　本　　昇（国士舘大学）

アイリッシュ・アメリカンとは，アイルランドに生まれてアメリカに移住した人々とその末裔のことである。米国商務省国勢調査部によれば，2014年の人口は，3300万人余，アメリカの総人口の約10％に当たる。５人に１人がアイルランド系であった時期もあるという。彼らはパディと呼ばれて差別を受けながらも，インフラ整備から文化に至るまでアメリカの発展に貢献してきた。我が国の文学研究においては，個々の作家の研究は進んでいるものの，アメリカ文学の視座からアイリッシュ・アメリカンを総体としてとらえた研究はそう多くない。本ワークショップは，その領域を探究する試みである。

西垣内は，解説を兼ねて，雑誌や新聞に登場するアイリッシュ・アメリカンにも目を向けながら，歴史的背景を中心に論じる。アメリカへの移民は，1845年から10年間で100万人以上の死者を出したいわゆる「じゃがいも飢饉」によって加速し，全人口の30％にあたる250万人以上が海を渡った。乗る船は「棺桶船」，着いた先はスラムでの雑居や「アイルランド人お断り」の張り紙に象徴される差別といった彼らの苦難の道のりを概観するとともに，アイルランドからの移民に多数含まれていた女性，一様にブリジットと呼ばれ，メイドとして働いて，たくましく生きた母親世代，そして，教育現場を担い，時には闘争も厭わなかった娘世代が，通時的，また，共時的ネットワークを築きながらアメリカ社会に浸透していった姿に注目する。

長岡は，「アイルランド移民とインターエスニック文学」について論じる。「じゃがいも飢饉」がアイルランドにもたらした決定的な変化のひとつは，極めて長期にわたる移民の流出であった。とりわけ米国には20世紀前半にかけて大量に移住し，強固なコミュニティを都市部に形成する一方で，主流社会からはしばしば「白人未満」の扱いを受けていく。飢饉，貧困，移民，差別によるトラウマ記憶を抱えつつ，米国のアイリッシュはどのように自らの民族性を（再）構築していくのか。また他のエスニック・グループは，そのようなアイリッシュ系移民をどのように見ていくのか。主流白人社会から一方的，画一的に描かれるだけの民族集団としてではなく，別の視点から表出されるアイリッシュの一端をとらえ，インターエスニックな文脈からの考察を試みる。

馬場は現代アイルランド人作家，ジョセフ・オコナー（Joseph O'Connor, 1963-）が合衆国に遍在する九つの「ダブリン」という名をもつ町をたどるハイウェイ・トラベローグ，『ダブリン USA』（*Sweet Liberty: Travels in Irish America*, 1996）を足掛かりに，現在のアイルランド文化とアイリッシュ・アメリカン文化との関係について考察する。面白いことに，ダブリン育ちのオコナーが＜アイリッシュネス＞なるものをはじめて自覚する契機になったのは，アイルランドを訪れたアメリカ人旅行者との出会いだった。大西洋を渡った先人たちを想い，合衆国に根付いていると思しきアイリッシュネスを求めて，オコナーは東海岸から西海岸へ，ハイウェイ沿いに合衆国内のダブリンを転々とする。しかし，彼がイメージするアイリッシュネスはそこにない。オコナーが旅するアメリカン・ロードに現れては遠ざかる逃げ水のような＜浮遊する＞アイリッシュネスの行方について検討する。

シンポジア（午後１時30分～４時30分）

シンポジアムⅠ（中部支部発題）（ノートルダムホール中央棟　640ND）

大統領選挙とアメリカ文学

司会・講師　川　村　亜　樹（愛知大学）
講師　長　澤　唯　史（椙山女学園大学）
講師　越　智　博　美（一橋大学）
講師　藤　田　淳　志（愛知学院大学）

2016年のアメリカ大統領選挙は，Hillary Clinton, Bernie Sanders，そして，Donald Trump らによって選挙戦が進められてきた。アメリカ初の黒人大統領となって，ノーベル平和賞を受賞し，自動車業界を救済するとともに医療保険制度改革をおこなった Barack Obama 以後のアメリカ政治をめぐって，「ガラスの天井の打破」「社会主義にもとづく公立大学の学費無償化」といった，さらなるリベラルな政治的課題が掲げられた。しかしその一方で，格差拡大からくる貧困にあえぎ，アファーマティヴ・アクションやポリティカルコレクトネスなどの施策や態度をとおして構築されてきた「お上品な」リベラリズムに対して反感を覚える保守層が，Trump 人気というかたちで台頭した。極端な政治公約が喧伝され，バックラッシュや反知性主義といった言葉だけでは説明しきれない，新たな政治局面をアメリカ社会は迎えたように見える。

こうした政治動向の変化は，文学の政治的態度や理論の変容とも連動しているはずである。アメリカの作家や思想家は，2000年代，イラク戦争を含めた Bush 政権の運営を個々のテクストにおいて露骨に非難していたが，リーマンショック時に誕生した2010年代の Obama 政権に対してはどのような態度を取っていただろうか。脱構築的な眼差しで体制批判を展開した先に，何か生産的な提言はなされたであろうか。映画の世界とは異なり，大統領選挙そのものに焦点を当てた文学作品は少なく，また，文学がアメリカ政治に直接的に多大な影響を与えるとも考えにくいが，少なくとも，現在の大統領選挙戦をとおして起こっている政治風潮は，文学作品においても兆候的に現れているはずである。そこで本シンポジアムでは，20世紀中盤から現在に至る，小説，演劇作品を取り上げ，文学におけるアメリカ大統領のパブリックイメージについて検討し，2016年の大統領選挙を特徴づけている社会的要因の予兆を探るとともに，理論以後の時代にアメリカ文学（研究）が持つ政治的可能性について議論してみたい。

（文責：川村亜樹）

ヒーローと悪漢の狭間で――パブリックイメージとしての大統領

長　澤　唯　史

ハリウッド映画における大統領のイメージは，*Young Mr. Lincoln*（1938），*Abe Lincoln in Illinois*（1940），*Sunrise at Campobello*（1960）などの立身出世伝やヒューマンドラマの主人公から，*All the President's Men*（1976）や *Absolute Power*（1997）における悪役としての権力者，そして *Independence Day*（1996）や *Air Force One*（1997）のアクション・ヒーローまで多岐に及ぶ。その中で90年代後半に現れた，直接行動によって大衆に働きかける，あるいは影響を及ぼす大統領のあり方がとくに注意を引く。殺人事件の目撃者を亡き者にしようとする悪役であれ，自ら戦闘機の操縦桿を握りエイリアンとの戦いの先頭に立つ英雄であれ，日本の政治家にはありえない暴れっぷりである。

George Washington，Theodore Roosevelt から，Dwight David Eisenhower，John F. Kennedy まで，少なからぬ数の戦場の英雄を大統領に選んだ国であるから，驚くに値しないことかもしれない。それでもやはり，フィクションにおける大統領や政治家は（例が必ずしも多くないとはいえ），間接的にではなく直接的に大衆と関わることが，政治家としての価値や名声を高める，という描き方をされることが多いのはなぜか。アメリカ人にとって大統領とは何者なのか。それを二つの大衆向け小説を例にとって考察してみたい。

一つは後にミステリー作家としてゆるぎない地位を獲得する Rex Stout（1886-1975）の *The President Vanishes*（1934）。Nero Wolfe というミステリー史に燦然と輝く名探偵を世に送り出した Stout だが，*The New Masses* の創刊や Vanguad Press の設立に深く関わったリベラル派知識人でもあった。ニューディール政策もいち早く支持した Stout が，その FDR の任期が始まってすぐに大統領が失踪するという小説を書いたのはなぜか。

そしてもう一冊は，SF 作家 Philip K. Dick（1928-82）の *The Crack in Space*（1966）。2080年のアメリカで黒人初の大統領候補が誕生するという，今や現実に遥かに後れを取ってしまった小説ではあるが，大統領選と異世界からの侵略テーマを組み合わせた異色作である。大統領に求められる資質とは何かを考察するための一つの材料として，とくにこの黒人大統領候補 Jim Briskin に焦点を当ててみる。

南部の大統領と血の系譜――パブリックイメージとしての大統領

越　智　博　美

アメリカの歴史，ことに南部の歴史を考えるときに，そこに人種を読み込まないことは難しい。とりわけヴァージニアの農園主 Thomas Jefferson と Sally Hemings の隠れた関係とその血の系譜は南部の歴史，アメリカの歴史が抱え込んだものとして，文学においても重要なモチーフとなっており，記憶に新しいところでは Barbara Chase-Ribould の *Sally Hemings*（1979），*The President's Daughter*（1994），Steve Erickson, *ARC d'X*（1993）などがある。

南部の小説家，詩人，批評家である Robert Penn Warren も Jefferson をめぐる考察をしており，Jefferson の係累の甥が起こした陰惨な奴隷殺人事件を扱った長編詩 *Brother to Dragons: A Tale in Verse and Voices*（1953，改定版1979）において，Jefferson の人生について，明らかに本人を示唆する R.P.W. という人物の語りを寄り添わせている。長年にわたって Warren が考え続けた人間の罪深さは，1946年の発表の *All the King's Men* においては語り手 Jack Burden みずからの親子の血や罪の問題として，大統領になることも嘱望されながらも女性関係ゆえに命を落とす州知事 Willie Stark の放縦な性のありようとして，あるいは Jack Burden が歴史家として調べていた Cass Mastern の挿話における奴隷売買の逸話に現れている。*All the King's Men* の系譜は，Richard Nixon のスキャンダルを暴いた記者 Bob Woodward と Carl Bernstein の物語を描いた映画のタイトル *All the President's Men*（1976）の連想を経て，Bill Clinton をモデルにした匿名筆者（現在では Joe Klein と判明）による *Primary Colors*（1996）へと至っている。

1998年には John Travolta を主人公に映画化もされた *Primary Colors* は，明らかに Clinton とそのスキャンダルをモデルにしながらも，*All the King's Men* を意識した作品である。Jack Burden に当たる語り手を据え，また主人公の政治家には Burden と同様の血の問題――誰が自分の父親なのか――がまとわりつく。実名小説とは言いながらも，登場人物の名前や設定において，多くを *All the King's Men* に負っている。この作品は，いかなるところを Warren の作品から引き継ぎ，書き換えているのだろうか。それは南部の政治家というイメージ，あるいは民主党の政治家というイメージとなんらかの接点があるのだろうか。また Clinton が Toni Morrison などによってアフリカ系アメリカ人にたとえられていたことと，この小説における語り手を黒人に設定していることとは――さらに遡れば，Warren が考え続けた問題系とは――何か関係があるのだろうか。本発表では，アメリカの大統領のパブリックイメージを隠されたスキャンダルという点から *Primary Colors* を中心に考えてみたい。

結婚の平等と大統領選挙と演劇――2004年から2016年大統領選挙まで

藤　田　淳　志

近年のアメリカ大統領選挙では，同性婚の是非が大きな争点のひとつとなっている。これは2004年の大統領選挙で，宗教右派の取り込みを狙う George W. Bush の参謀だった Karl Rove の戦略に始まった。Barack Obama 現大統領は長い間同性婚に対して自身の態度が「進化中」であるとしていたが，２期目の選挙を控えた2012年になって支持を表明した。2015年最高裁判決によって全米で「結婚の平等」が実現し，Hillary Clinton は出馬表明のビデオにゲイ，レズビアンカップルを登場させている。

2016年の選挙では LGBT の問題よりも経済や移民などが取り上げられているが，重要な議論よりも激しいネガティブキャンペーンが繰り広げられている印象のほうが強い（本稿執筆時）。しかし Donald Trump と指名争いした Ted Cruz はキャンペーンの最中に同性愛者に死刑を訴える集会に出席し，Trump も保守の最高裁判事の指名を約束するなどしており，LGBT にとって状況はまだ予断を許さない。また州レベルでは「宗教の自由」法が提案され，トランスジェンダーの権利を著しく脅かす法が可決されるなど，激しいバックラッシュが起きている。

1960年代終盤以降のゲイリベレーションから1980年代，90年代のエイズ危機まで，アメリカ演劇は同性愛者の政治を描き，時に密接にそれにコミットしてきた。

本発表では2000年代以降の作品について上記期間の大統領選挙が示す政治状況を概観しながら論じる。

ゲイリベレーションは一定の成果を得，エイズは多くのアメリカ人にとって死なない病気になった。その後，LGBT による運動の目標は，問題含みではあるものの「結婚の平等」実現へと焦点化し，昨年にはマイノリティの権利獲得運動として異例の早さで，それも実現した。このような状況の中，一部には現在の同性愛者を描く演劇は脱政治化したとも言われる。セクシュアル・マイノリティとしてのアイデンティティの問題が大きく取り上げられなかったり，子育てなど家族を描いたりする作品も多い。

ブロードウェイ，オフブロードウェイで近年上演された多くの作品を取り上げることで，「結婚の平等」運動以降の作品の特徴を提示し，それらが政治状況をどのように反映し，どう取り組んでいるのかを考察する。

言及する作品：*The Next Fall* (Geoffrey Nauffts, 2010), *The Whale* (Samuel D. Hunter, 2012), *Sons of the Prophet* (Stephen Karam, 2011), *The Normal Heart* (Larry Kramer, 2011 revival production), *Fun Home* (Lisa Kron and Jeanine Tesori, 2013/2015), *Mothers and Sons* (Terrence McNally, 2014), *Humans* (Stephen Karam, 2015), *Hir* (Taylor Mac, 2015)

「不自由な」アメリカの再生

川　村　亜　樹

George W. Bush が二期目の大統領選挙に臨んだ2004年，Philip Roth は史実をもとにした *The Plot against America* を発表し，共和党候補 Charles A. Lindbergh，民主党候補 Franklin D. Roosevelt の対決というかたちで1940年のアメリカ大統領選挙を描いた。Lindbergh が勝利を収め，外交政策として平和を求めて孤立主義を掲げ，Adolf Hitler と友好関係を結ぶ協定を締結する。その結果，物語の中心を成す一家をはじめ，アメリカ人となったユダヤ人たちは，恐怖と怒りに震える日々を余儀なくされ，Walter Winchell は Lindbergh 再選を阻止すべく活動を開始するが，KKK とアメリカ・ナチス党員によって暗殺される。作者の意図は別にして，戦争をめぐるジレンマのなかでのこの物語は，2004年の大統領選挙に対する政治的メッセージと受け取れる。また，若く逞しいアメリカを体現し，孤立主義を唱える Lindbergh は，「不自由な」アメリカの再生を掲げる Donald Trump 台頭を連想させる。

そして，Jonathan Franzen の *Freedom*（2010）は，Bill Clinton のスキャンダル，George W. Bush のイラク戦争，さらには，Barack Obama の到来に言及しながら，グローバル化が進み，新自由主義による支配と環境破壊が問題視される時代における文学の政治的態度に関して興味深い視点を提供している。"Greener than Greenpeace"（3）でフェミニストの Walter と，善き主婦として隣人愛溢れる Patty の Berglund 夫妻は，周囲から "superguilty sort of liberals"（8）と見られている。だが，Walter はそのリベラルな理想が祟って妻と円満な関係を築けず，気が付けばワシントン D.C. で体制派の手先となっている。Patty の方も，実は民主党州議会議員の母との関係から政治嫌いで，Reagan 主義的側面すら臭わせる。そんななか，大学生になり学費捻出に苦労する息子 Joey は，9.11に対する国政をめぐる議論を冷ややかに眺めつつ共和党支持者となるが，軍需産業の下請け作業で高額収入を得たあと，倫理観の欠如を認識して父の道徳規範に立ち返る。このように，登場人物たちを支配するイデオロギーは現実と向き合うなかで修正を余儀なくされるが，南米でのコーヒー栽培ビジネスで経済的に豊かになりボルボを走らせる Joey の姿は，本作品の結末が妥協や諦観ではないことを示している。そこで本発表では，二作品をとおして，2016年の大統領選挙をもたらした社会的要因の予兆を探りつつ，理論以後の時代における文学の政治的可能性について検討したい。

シンポジアⅡ（中・四国支部発題）（ノートルダムホール中央棟　630ND）

アメリカ文学史を語る——正典戦争後の再考と実践

司会・講師　重　追　和　美（比治山大学）
講師　城　戸　光　世（広島大学）
講師　前　田　一　平（鳴門教育大学）
講師　諏訪部　浩　一（東京大学）

「アメリカ文学について多くの人と語らいたい」という，実に素朴な私（司会　重追和美）の希望が本シンポジウム構想のきっかけである。Faulkner の語りの技法研究を専門とする私は，他の作家の，また，異なる方法論の研究者とは，ほとんど研究の接点がない。多くの学会関係者が接点を共有できるテーマは何か？その答えが「アメリカ文学史」だった。

アメリカ文学の膨大な作品群を，時機を得たテーマを中心に据えて配置し，面白いキーワードを切り口にして気鋭の講師陣が独自に解題していくのが，シンポジウムの醍醐味だ。時機の点で，アメリカ文学史は適切だと思えた。過去のシンポジウムを調べると，90年代にアメリカ文学史についての議論が積極的に行なわれて以来，このテーマはあまり議論されていない。1956年に「日本アメリカ文学会」という学会名が歴史に初めて登場してから，本年は60年の節目にあたる。さらに，21世紀を迎える辺りから，日本人研究者が読み応えのあるアメリカ文学史を相次いで出版している。

切り口とするキーワードの選定は，講師４人の議論に基づいて行われた。90年代日本でアメリカ文学史議論が白熱したのは，アメリカにおけるアメリカ文学史の「正典戦争（the canon wars）」の影響である。そこで，「正典戦争」をキーワードの一つとした上で，私たち講師が自由に個々の構想を語り合った。結果，正典戦争の原因となった作品評価基準の修正及びそれに伴う文学史「再考」の問題と，正典戦争後の大学の教育現場でどのようにアメリカ文学史を語るかという「実践」の問題に，私たちの関心は収斂していった。

最終的に決定したタイトルが「アメリカ文学史を語る——正典戦争後の再考と実践」である。シンポジウム前半は，アメリカ文学史の正典選定に関わる作品評価基準に焦点を当てる。日本におけるアメリカ文学史再考を私が，アメリカでのアメリカ文学史再考を城戸光世氏が担当する。後半は，現在の大学教育現場におけるアメリカ文学史講義に焦点を当てる。前田一平氏が鳴門教育大学教育学部での自らのアメリカ文学史講義について，諏訪部浩一氏が東京大学文学部での自らのアメリカ文学史講義について語る。総じて，講師らが独自に描き出す各様のアメリカ文学史像が，アメリカ文学史をめぐる活発な議論をフロアにもたらし，フロア全体がアメリカ文学に携わる者の熱い語りあいの場に化すことを期待したい。

日本におけるアメリカ文学史——作品評価基準の変化を中心に

重　追　和　美

Haruo Shirane は，文学史において正典（canon）に選定されたテクストに対するアプローチには，「テクストのなかに基礎的根拠ないし基本原則を見る基本主義者（foundationalist）」によるものと「テクスト自体には基本的根拠などない，カノンに選別されたテクストは，ある時代のある特定のグループないし社会集団の利益・関心を反映したものに他ならない」と考える「反基本主義者」によるものの二つがあるとしている。本発表では，Shirane の分類に倣って，文学史の正典選定に関わる作品評価基準には，「文学テクストそのものに内在する（とされる）価値」に基づく「基本主義」と，「ある時代のある特定のグループないし社会集団によって，自らの利益・関心に利するようにテクストに与えられた価値」に基づく「反基本主義」の，二極があるとしておこう。

アメリカにおいては，アメリカ文学史の正典選定に関わる作品評価基準は反基本主義を志向してきた。20世紀を代表する三つのアメリカ文学史，*The Cambridge History of American Literature*（1917-21），以下 *CHAL*，*Literary History of the United States*（1946），以下 *LHUS*，*Columbia Literary History of the United States*（1988），以下 *CLHUS* の編集方針を一瞥すれば，その傾向は明らかだ。*CHAL* には，かつての宗主国イギリスに対して文化的にも独立しようとする意図を，*LHUS* には多州にまたがる領域を統一さ

れた一国家と見なそうとする意図を，*CLHUS* には一国家が内包する多様な文化の価値を積極的に認めようとする意図を，すなわち，その時代における国民国家イデオロギーに利する作品を評価しようとする特定集団の意図を観察できる。

一方，日本におけるアメリカ文学史を明治からたどってみると，正典選定に関わる作品評価基準が基本主義的傾向を示すのが分かる。それらが反基本主義的アメリカ版アメリカ文学史を参照しており，また，Shirane が指摘するように，今日一般的には反基本主義が優勢であるにも拘らず。なぜ，日本版アメリカ文学史は基本主義的なのか。本発表では，代表的日本版アメリカ文学史（齋藤勇著，大橋健三郎他編，渡辺利雄著）の出版年代を参照して，明治から現在までをおおよそ三期（第一期　明治から齋藤まで，第二期　大橋を中心に齋藤以降渡辺の前まで，第三期　渡辺以降）に区切り，日本版アメリカ文学史の正典選定に関わる作品評価基準の変化，及び，変化の志向原理を探る。

おいしい「古典」の作り方——*The Scarlet Letter* の場合

城　戸　光　世

ある本を「古典」(classic) と呼ぶ際にはどのような判断基準が働くのだろうか。アジアやヨーロッパ諸国ほど長い国民文学の伝統をもたないアメリカにおける「古典」の評価基準を，単純に時の試練に耐えた作品と捉えることが難しいのは，約30年も前に Jane Tompkins が指摘したとおりであろう。

どの作品を「古典」と呼ぶかという判断は，アメリカ文学史やアンソロジーに収録される作品，いわゆる正典（canon）の選定とも密接に関わる。キャノン改訂を反映した内容で話題となったコロンビア米文学史（1988）には，まだ“The American Renaissance”と題する章があり，Emerson, Thoreau, Hawthorne, Melville, Whitman のみ扱われていた。しかしその後「アメリカン・ルネサンス」の範囲が，人種，地域，ジェンダーの面で格段に拡がりを見せてきたのは周知の通りである。しかし文学にまつわる項目が年代や日付順に均等に並ぶ21世紀のアメリカ文学史 *A New Literary History of America*（2009）では，「アメリカン・ルネサンス」という用語は索引にすら登場せず，2015年刊行の *A Companion to American Literary Studies* にいたっては，時代や作家，ジャンルやテーマによる準拠枠すら退けられ，近年の文学研究における「新しいパラダイムやモデルの発展」の一例が示されている。ところがその編者たちも指摘するように，近年アメリカ文学研究において，文学性や審美性への強い関心が再燃しつつあるという。キャノン形成を政治やアカデミズムにおける権威との関係で論じてきた Paul Lauter も，今では多様な学生たちが，伝統的な文化価値や国民的規準といった「内容」の理解を必要としているようだと述べる（“Contexts for Canons,” 2009）。そのような傾向は，Lawrence Buell の *The Dream of the Great American Novel*（2014）や Harold Bloom の *The Daemon Knows: Literary Greatness and the American Sublime*（2016）といった，近年目立つ著名な文芸評論家によるアメリカ古典文学の再考や，2010年以来実施されているアメリカの高等教育改革，The Common Core State Standards をめぐる動きなどとも関連があるのだろうか。本報告では，アメリカン・ルネサンス，なかでもアメリカ古典文学の筆頭に挙げられることの多い *The Scarlet Letter* を中心に，アメリカ文学のキャノン形成をめぐる批評史とアメリカにおける最近の古典文学研究および教育動向を検討してみたい。

教育学部のアメリカ文学史

前　田　一　平

今日でもアメリカ文学を講じられる数少ない大学教育機関が教員養成学部です。教員免許法において，免許教科「英語」に関する単位修得科目として「英米文学」が命をつないでいます。ただ，中学校英語教科書には英米文学は皆無に等しい。唯一採択されている「アメリカ文学」作家の作品が O. Henry の“After Twenty Years”と“Jimmy Valentine”です。英語教育学者の視野に入る文学作品が文学史上あるいは研究上ほとんど俎上に載らない O. Henry のそれであるならば，そこに焦点を当てた文学史の授業を意識的に実施してみてはどうか。これが教育学部におけるアウェイ感覚に長年苦しんだ果ての結論です。

以下は私の教育学部用アメリカ文学史「物語論（物語の変容）」の一部です。まず，英語版「桃太郎」の紙芝居“Peach Boy”で物語の原型を（再）認識させ，アリストテレス『詩学』が規定する劇の組み立てを紹介し，Edgar Allan Poe の“Philosophy of Composition”から物語の原型の理論化に導き，物語論上 Poe の後継者として O. Henry を位置づけ，英語教科書採択作品の授業実践を経て Poe との違いを際立たせ，Naturalism を経由して Sherwood Anderson による O. Henry 批判とモダニズムに導き，Anderson の影響を踏み台にした Ernest Hemingway の“iceberg symbolism”を一応の区切りとします。最後に，Anderson と Hemingway の影響を認める Raymond Carver に触れて，前半部を終えます。

次に，学習指導要領が説く「多様性・異文化理解」を意識した視点をアメリカ文学史にもたらします。密航者としてであれ郵便船の３等室の客としてであれ，東アジアの人間にとってアメリカへの入り口は主として大陸の西側であり，アジア系移民にとっては New York 湾の Ellis Island ではなく San Francisco 湾の Angel Island でした。そのようにアメリカ大陸を反転させると，「私たち」のアメリカ文学史がみえてきます。日系，中国系，韓国系，フィリピン系，ベトナム系，インド系，カンボジア系などは，それぞれの国と民族の違いを際立たせて，多くの文学作品を生産してきました。これらの文学を読むことは，アメリカから逆照射する東アジア学習となり，アメリカ文学史は「多様性・異文化理解」の学習のためのすぐれたテクストとなるでしょう。

文学史と作家研究

諏訪部　浩　一

我々のほとんどは「大きな専門分野」と「小さな専門分野」を持っている。私の場合なら，「大きな専門」は「アメリカ文学」，そして「小さな専門」は「William Faulkner」ということになるわけだ。だが，この大小の専門を両立させるのは容易ではない。とりわけ「正典戦争」が起きた1980年代以降，加速度的に「細分化」した「小さな専門」に関する研究が（洗練された一方で）「蛸壺化」し，「大きな専門」に関してはなかなか手をつけられなくなってきている。我々は隣の研究者が何をやっているのかよく知らないし，「アメリカ文学史」を（「文学史研究」ではない形で）自分の課題としてまともに受けとめにくくなっているのだ。こうした現状は，アメリカ文学研究が——１つの学問分野となって１世紀近くを経て——ほとんど死期を迎えていることを示唆するようにさえ見える。

もちろん，それはそれでよいという考え方もあるだろう。だが，よくないのなら，何とかして「小さな専門」を「大きな専門」へと接続しなくてはならない。そのやり方は多様であり得るだろうが，すぐに思いつくものとしては，専門とする作家を文学史の中にきちんと位置づけて考えることはもとより，ある作家の専門家としての立場から文学史を構築するということである。「文学史」の代わりに「文学観」といってもいい。それぞれの研究者が自分なりの「文学史」や「文学観」を構築していれば，隣の研究者が何をやっているのか知らなくても，「話」だけはできるはずだ。複数の文学史，複数の文学観があってよいのだから（もっとも，それらがやがて１つに収斂していくのを目指すのが研究者というものではないかとも思うのだが），多文化主義を（「話」をしないことの）言い訳にするのではなく，（「話」をするために）実践するということだ。

こういったことを意識しつつ，本報告では Faulknerのキャリアと文学史の関係について考えてみたい。Cleanth Brooks の有名な言葉に，Faulkner は最初から最後までロマンティックだったというものがあり，これはおそらく正しい。これはおそらくアメリカ文学史全体がロマン主義の圏域にあるからであって——というとあまりにも大きな風呂敷を広げているようにも思えるが，Faulkner 研究者の目には文学史がそのように見えることもあるという１つの事例として受け取っていただきたい。